

奈良県における
障害のある人の
芸術文化活動に
関する調査



目次

1. 調査概要 1

- 1) 調査目的および調査方法 2
- 2) 結果 4
- 3) 提案 6

2. 調査報告 9

1) 障害者や支援者に対する調査 10

- 1. 福祉サービス事業所へのアンケート調査 10
- 2. 福祉サービス事業所、制作活動を行う個人へのインタビュー調査 25
 - 1) 調査の概要 25
 - 2) 結果 26
 - 3) インタビュー調査詳細 31

福祉サービス事業所

- 社会福祉法人青葉仁会 あおはにの家／萌あおはに 31
- 社会福祉法人いこま福祉会 かざぐるま 創作クラブ 33
- 社会福祉法人以和貴会 ワークサポートセンター今人 我楽／クラブ活動それいゆ 35
- 社会福祉法人在友会 フレンズまきば アトリエ創佳舎 37
- 社会福祉法人在友会 フレンズまきば ふらっぶ／ぼるか 39
- 社会福祉法人総合施設美吉野園 大淀授産所(現わーくさぼーとPono) 41
- 社会福祉法人総合施設美吉野園 吉野学園 アートスペースくれよん 43
- 社会福祉法人大和郡山育成福祉会 ひかり園 45
- 特定非営利活動法人Msねっと 47
- 特定非営利活動法人生活支援センターもちつもたれつ グループホームまめはうす 49
- 特定非営利活動法人生活支援センターもちつもたれつ 生活介護はればれ 51
- 特定非営利活動法人虹の家 53
- 一般社団法人北和福祉振興一道会 みんなの広場らんまん 55
- 合同会社しあわせ工房 ヨロコボ 57

制作活動を行う個人

- 北口拓巳さん 59
- 宮本昭寿さん 61
- 山口みづほさん(ならやま会 いずみ園) 63
- 山崎康史さん 65
- Aさん 67

2) 市民の関心に対する調査 69

- 1. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおける
ボランティアのアンケート調査 69
- 2. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおける
プライベート美術館参加団体へのアンケート調査 74
- 3. 作品購入者へのインタビュー調査 79
 - 近畿セキスイハイム工業株式会社 81
 - 株式会社リブドゥコーポレーション 83
 - 川上文雄さん 85
- 4. 作品仲介ギャラリーへのインタビュー調査 87
 - あしたの箱 89
 - 浜崎健立現代美術館 91

1

調査概要

- 1) 調査目的および調査方法 2
- 2) 結果 4
- 3) 提案 6

1) 調査目的および調査方法

昨今、奈良県内でもユニークな創作活動をしている福祉サービス事業所や個人が増えてきており、生活の質を向上させる取り組みとして、また社会参加のきっかけとして期待がよせられている。たんぼぼの家では、障害者個々の表現を生きる証として尊重し、芸術活動としての意識を高めていく必要性を感じ、これまで様々な実践を重ねてきた。

このたび、たんぼぼの家では、「平成26年度障害者の芸術活動支援モデル事業(厚生労働省)」において、主に奈良県内の障害者の芸術活動の現状と、支援者等の抱える課題や期待を多面的に把握することを目的に、大きく分けて1)障害者や支援者に対する調査と、2)市民の関心に対する調査の2つの調査を行った。

1) 障害者や支援者に対する調査

この調査においては、以下の2つの調査を行った。

1. 福祉サービス事業所へのアンケート調査
2. 福祉サービス事業所、制作活動を行う個人へのインタビュー調査

調査目的

障害者や支援者など、障害のある人の芸術文化活動の現状や課題、ニーズをとらえるために、奈良県内の障害福祉サービス事業所、特別支援学校、精神科クリニックなどを対象に、アンケート調査を行った。また、アンケート調査だけでは掘り取れない福祉サービス事業所の思いやニーズをとらえるために、奈良県内の福祉サービス事業所および、奈良県内において制作を行っている個人にインタビュー調査を行った。

なお、インタビュー調査においては、事務局職員だけでなく、アーティスト、デザイナー、障害福祉研究者、キュレーターが調査者となった。さまざまな背景をもった調査者が、現場に行き感じて感じる雰囲気や施設職員と利用者との関係性などを対比させながら、障害者の芸術活動を支援していくための課題を考察し、提言につなげるためである。また、調査によって見えてきた課題を通じて、どのような事業を行うことが現場のニーズに応えることになるのかを考える。

調査期間

2014年10月～2015年1月

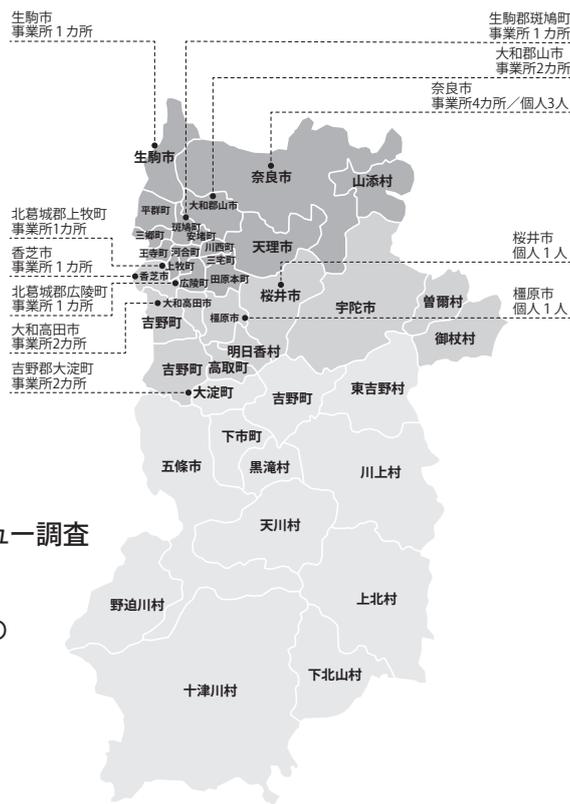
調査対象

1. 福祉サービス事業所へのアンケート調査

障害福祉サービス事業所、特別支援学校、精神科クリニックなど(全430件)

2. 福祉サービス事業所、制作活動を行う個人へのインタビュー調査

福祉サービス事業所15、個人5(1件は福祉サービス事業所と個人重複)(福祉サービス事業所所在地、個人の居住地については、右図を参照)



調査方法

1. 福祉サービス事業所へのアンケート調査

質問紙によるアンケート調査 430件中52件回答(有効回答率12.1%)

2. 福祉サービス事業所、制作活動を行う個人へのインタビュー調査

福祉サービス事業所15団体、個人5名に対して事務局職員、アーティスト、デザイナー、障害福祉研究者、キュレーターなどの調査者によるインタビュー調査

2) 市民の関心に対する調査

この調査においては、以下の4つの調査を行った。

1. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるボランティアのアンケート調査

2. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるプライベート美術館参加団体へのアンケート調査

3. 作品購入者へのインタビュー調査

4. 作品仲介ギャラリーへのインタビュー調査

調査目的

市民も参加する奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA(主催:奈良県)に参加した運営ボランティアおよび、芸術祭での「プライベート美術館」というコミュニティアートプロジェクトで障害者アートを展示した参加団体へ、アンケート調査を行った。彼らは障害者アートへの意識・関心が高い層と思われる。感想や来場者の反応から、障害者アートの普及に何が必要かを探る。

また作品購入企業と個人、および展示や販売などを代行する作品仲介ギャラリーの経営者にインタビュー調査を行った。障害者アートの購入動機や購入状の課題、作品選定の基準、価格などへの考えを知ること、今後の障害者アートの普及のための課題を明らかにする。

調査期間

2015年1月～3月

調査対象

1. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるボランティアのアンケート調査

奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2014-2015(会期:2015年1月31日(土)～2月8日(日)、会場:奈良県文化会館、東大寺、奈良町界限ほか)のボランティア参加者(60名)

2. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるプライベート美術館参加団体へのアンケート調査

奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2014-2015(会期:2015年1月31日(土)～2月8日(日)、会場:奈良県文化会館、東大寺、奈良町界限ほか)のコミュニティプロジェクト、プライベート美術館(会期:2015年1月20日(火)～2月8日(日)、会場:奈良町界限、近鉄奈良駅周辺商店街の店舗ほか)として参加した店舗(44店)

3. 作品購入者へのインタビュー調査

主に社会福祉法人わたぼうしの会 たんぽぽの家アートセンター HANA (以下、たんぽぽの家)に所属す

る障害のあるアーティストの作品を購入した企業（2社）と障害のあるアーティストの作品のコレクターである個人（1名）

4. 作品仲介ギャラリーへのインタビュー調査

主にたんぼぼの家に所属する障害のあるアーティストの作品を展示し、売買してきた仲介業者（2社）

調査方法

1. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるボランティアのアンケート調査

質問紙によるアンケート調査 60件中17件回答（有効回答率23.8%）

2. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるプライベート美術館参加団体へのアンケート調査

質問紙によるアンケート調査 44店中27店回答（有効回答率61.4%）

3. 作品購入者へのインタビュー調査

主にたんぼぼの家に所属する障害のあるアーティストの作品を多数購入した企業（2社）と個人（1名）に対して、調査者によるインタビュー調査

4. 作品仲介ギャラリーへのインタビュー調査

主にたんぼぼの家に所属する障害のあるアーティストの作品を展示し、売買できる仲介業者（2社）に対して、調査者によるインタビュー調査

2) 結果

1) 障害者や支援者に対する調査

1. 福祉サービス事業所へのアンケート調査

有効回答率が12.1%と低い結果は、まだまだ福祉の現場でアート活動が浸透していないからだと思われる。

また、芸術文化活動に関心のある福祉サービス事業所は90%に達したものの、実際に行っているのは66%にとどまった。行えない理由としては、講師がいないことや創作の専門的な技術や権利関係などについて職員の情報不足があげられた。日常の介護等の支援で職員に余裕がない中で、芸術活動に関する知識を職員が新たに身につけるには、ハードルが高いと思われるよううかがえた。

芸術活動を行っている福祉サービス事業所が感じている課題として、物理的な面「画材や道具を買うお金がない、不足している」「場所がない」、および知識面「職員が画材や道具をあまり知らない」「職員の知識、技術の不足」「価格の付け方がわからない」「権利についての知識がない」に大別された。情報や知識に関しては研修などの充実が効果的ではないだろうか。

2. 福祉サービス事業所、制作を行う個人へのインタビュー調査

多くの福祉サービス事業所で芸術活動を進めて行くにあたり、活動を継続することの基盤の緩さが明らかとなった。具体的には、人材不足（専門家も含めて）、資金不足（画材の購入も）、研修の必要性（パソコンで加工するなど技術の取得なども）が示されている。活動の位置づけや作品の価格に決まった指標がないことも、個々の職員にとって活動自体や目指していくところへの迷いを生み出す原因ともなっていた。研修

なども含めて他の福祉サービス事業所とのつながりをつくる仕組みは、アート活動の支援に関わる施設職員にとって有効であると考えられる。また、福祉が専門ではなくアートを教える外部講師やコミュニケーションに障害のある利用者を支援している職員にとって、利用者とのコミュニケーションの難しさを日々感じている様子も示された。

発表場所を増やしていく取り組みや絵を描く人同士の集まりがあることは、利用者の楽しみや自信につながっているので、重視したいところである。発表の手段や方法についても情報を手に入れるツールが少ない、と感じている様子もうかがえた。

障害者芸術に対する福祉サービス事業所／職員の意識の向上、ひいては社会の意識向上の必要性が、特にアートを専門にする支援職員からは多く聞かれた。価格の付け方や権利意識にも通じるものであると思われた。

2) 市民の関心に対する調査

1. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるボランティアのアンケート調査

障害者芸術祭へのボランティア参加は、初めてが37%、2回以上が63%だった。「去年も参加して、その時とても楽しかったから」「美術やクリエイティブな活動に以前から関心を抱いており、自分もその活動を手伝いたかったから」「学校の授業の一環」など参加理由は様々であったが、また参加したいと答えた人は100%にのぼった。ボランティアたちは悩みながらも他のボランティアたちとも話しながら、その活動自体に「楽しい」という価値づけをしていく様子もうかがえた。

障害のある作家の作品を実際に見ることや、芸術祭の来場者や出展している障害のある作家たちとやり取りしたことで、すべての年齢層のボランティアは、自然に「障害のある人の作品」という以上に、「ある作家さんの作品」という思考に変化していった。実際に「出会い」「経験」することが障害者に対する価値観の転換に重要であることをうかがわせた。

2. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるプライベート美術館参加団体へのアンケート調査

プライベート美術館参加が今年4回目(毎年参加している)という店舗が65%にのぼった。「障害者アートに興味があった」「地域とのつながりを深めるため」「啓蒙啓発」など様々な理由で参加に至っていた。

お店に絵を飾ったところ、「明るく、楽しい空間・雰囲気になった」「インパクトがあってパワーを感じた」などよい感想がほとんどだった。

お店に来たお客さんの反応も、「毎年楽しみ」、「絵があることで店にゆっくり滞在して頂いた」などのお店にとってもよい効果があった。

しかし、絵をレンタルしたいか、あるいは買いたいかという質問に対して、64%が「したいと思わない」「いまは考えていない」と回答している。作品の価格の曖昧さや障害のある人の作品に対する社会の価値づけが影響してしまうのではないだろうか。現状では、まだ障害のある人の作品を販売することへの難しさが読み取れた。

3. 作品購入者へのインタビュー調査

企業は社会貢献の一環として購入することも多い。障害者アートに触れるきっかけがそこで生まれることはよい広まり方の1つといえるのではないだろうか。結果として、社員個人個人は「明るくなった」などの感想をもつようになっていた。

また、個人で作品を購入しているある大学教員からは、大学の授業で障害のある人の絵を教材として使っている事例が報告された。学生が障害者アートにふれ、誰の評価にも左右されず自然な感想を述べら

れるようになっており、学生に高い教育的効果をもたらしていると考えられる。ただ、そのためには、教員が障害者アートに慣れ親しみ、理解と知識をもっていることが、必要とされるのではないだろうか。

4. 作品仲介ギャラリーへのインタビュー調査

以前から興味があったこともあるが、実際に仲介業者として障害のある人の作品を常時扱うには、障害者アートなどの何らかのイベントに参加したなどのきっかけが後押しになる。

仲介業者としては、障害者健常者の垣根を越えた「ある作家さんの作品」として展示販売するようになっているが、一般の人に見てもらい買ってもらうためには、もう一つ上の工夫なり仕掛けが必要かもしれない。

ある仲介業者からは、障害者芸術専門のオークションを開催するという案も出されていた。あるいは、一般の人が見てもらい工夫や仕掛けのために、仲介業者と福祉施設職員との協同連携も有効のように思われる。

3) 提案

今回、実施した上記6つのアンケート、インタビュー調査の結果より、障害者の芸術活動を支援していくために、以下の提案を行いたい。

- ・創作環境の充実

資金、物理的スペース、専門家の導入、発表の場、アーティスト同士の繋がり

- ・研修体制の充実

施設職員に対する研修(アートに関して、権利に関して等)

- ・権利意識の普及

価格の付け方について、著作権の保護

- ・障害者芸術に関する社会の意識変革

価格についての認識、ボランティアに参加する意義の普及、一般の人が障害者芸術を見やすい仕掛けをつくる、市場の活性化

まずは、創作環境の充実があげられる。障害者の、本来芸術活動をしたい、というニーズを満たすために必要な、環境づくりである。施設によって、その程度は様々な状況が今回の調査では明らかになった。事業そのものによる理由であったり、資金的な都合による理由が多かったが、アートを専門にする職員がいる、あるいはアートに興味があったり外部講師を導入しているかなども影響されることが示された。また、今回の調査から、発表の場を増やすことや、障害のあるアーティスト同士が繋がれる場をつくることは、障害者に自信を与えることにも寄与する可能性があることもうかがえた。

アートを支援できる人材の育成については、支援職員や家族などが基本的な創作活動の技術について学ぶことができる研修が有効であると思われる。また、施設内でアートの意味や価値を認識しあう機会をつくることも大事な視点であると思われる。

次に、研修の充実である。これは芸術活動を行う障害者の権利を守り、安定した創作活動を確保するために必要なものと思われる。同時に施設同士のつながりをつくることで、職員の悩みや迷いも共有できやすいため、個々の職員を支える基盤づくりも必要である。福祉施設の職員は、作品の価格をつけたことがないことが多く、どのようにつけたらいいのか、という悩みもよく聞かれている。

一般に障害者芸術に関する権利意識が広まり、認知されていくことで、芸術活動を行う障害者は「アーティスト」「作者」と認識されるようになり、彼らの「作品」に対する著作権が保護されることにも繋がっていく。そのための仕組みを広げていくことが必要だと思われる。また、そもそも作品の価格に決まった基準はないが、基準のないことが、職員間の意見の齟齬や購入者からの驚きを生み出す要因ともなっていた。障害者芸術の価値を高めていくために、一般のギャラリーで扱われている作品の価格を知るなど、支援に携わる人自身が経験や知識を積んでいく必要がある。

また、障害者芸術に関して、ボランティアなどに一度参加してみることで自然に「すごい」という声もれてしまう、自己のお店に飾るとそのパワーに「圧倒される」ほど、それまでもっていた感覚とはギャップを経験していることも示された。ギャップを埋めていく仕掛けづくりは、すなわち障害者が自己の芸術活動そのものを仕事に繋げる仕組みの1つともなりうると考えられる。

そのためにまずは、障害者芸術の存在を「知る」ことが必要である。障害者芸術専門のオークションをつくる、という声も調査の中では聞かれたが、企業の社会貢献や学生教育のための教材としての使用も、障害者芸術を知るきっかけとなっていることが明らかとなった。販売の機会も大切だが、教育現場やコミュニティで展示、発表していく機会も有効である。

調査を通して、現場に足を運ぶ中で、ニーズを知るだけでなく、周辺環境や個々の支援者の思いについても知ることができた。アート活動、芸術文化活動といっても絵を描くことだけではなく、音楽や書、陶芸など多様な活動があり、またその目的も余暇活動として障害のある人の好きなことや楽しみの時間を保障していたり、仕事につなげていきたいと考えていたりとさまざまであった。そして、現場でかかわる人たちが障害のある人たちのことを尊重し、それぞれに意味ある活動であることを実感した。

本提案は、あくまで奈良県内の障害者芸術に関する調査を、限定された福祉サービス事業所、個人、イベントの中で実施したものから見出された知見である。そのため、一般化はできないが、幅広く多角的な視点からの調査に基づいた知見であり、今後日本において、支援の仕組みづくりのために有用なものではないかと考えられる。

次章からは、各調査についての結果を掲載する。なお、本書では「障害のある人の表現活動」、「芸術文化活動」、「アート活動」と言葉の統一を行っていない。また、「障害者アート」と表記した際に活動を示す場合と作品を示す場合がある。

2

調査報告

1) 障害者や支援者に対する調査 10

1. 福祉サービス事業所へのアンケート調査 10
2. 福祉サービス事業所、制作活動を行う個人へのインタビュー調査 25

福祉サービス事業所

- 社会福祉法人青葉仁会 あおはにの家／萌あおはに 31
- 社会福祉法人いこま福祉会 かざぐるま 創作クラブ 33
- 社会福祉法人以和貴会 ワークサポートセンター今人 我楽／クラブ活動それいゆ 35
- 社会福祉法人在友会 フレンズまきば アトリエ創佳舎 37
- 社会福祉法人在友会 フレンズまきば ふらっぷ／ぽるか 39
- 社会福祉法人総合施設美吉野園 大淀授産所(現わーくさぽーとPono) 41
- 社会福祉法人総合施設美吉野園 吉野学園 アートスペースくれよん 43
- 社会福祉法人大和郡山育成福祉会 ひかり園 45
- 特定非営利活動法人Msねっと 47
- 特定非営利活動法人生活支援センターもちつもたれつ グループホームまめはうす 49
- 特定非営利活動法人生活支援センターもちつもたれつ 生活介護はればれ 51
- 特定非営利活動法人虹の家 53
- 一般社団法人北和福祉振興一道会 みんなの広場らんまん 55
- 合同会社しあわせ工房 ヨロコボ 57

制作活動を行う個人

- 北口拓巳さん 59
- 宮本昭寿さん 61
- 山口みづほさん(ならやま会 いずみ園) 63
- 山崎康史さん 65
- Aさん 67

2) 市民の関心に対する調査 69

1. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるボランティアのアンケート調査 69
2. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるプライベート美術館参加団体へのアンケート調査 74
3. 作品購入者へのインタビュー調査 79
 - 近畿セキスイハイム工業株式会社 81
 - 株式会社リブドゥコーポレーション 83
 - 川上文雄さん 85
4. 作品仲介ギャラリーへのインタビュー調査 87
 - あしたの箱 89
 - 浜崎健立現代美術館 91

1) 障害者や支援者に対する調査

1. 福祉サービス事業所へのアンケート調査

障害福祉サービス事業所、特別支援学校、精神科クリニックなどを対象に、芸術活動の支援状況ならびに課題等を明らかにするため、アンケート調査を行った。

1) 調査の概要

調査期間

2014年11月26日～12月20日

質問紙送付先 全430件

福祉医療機構が運営する、福祉・保健・医療のポータルサイトWAM NET (<http://www.wam.go.jp/content/wamnet/pcpub/top/>)により、奈良県内の以下の福祉サービス事業所を検索(事業が重複しているところは1つにまとめた)し、出てきた以下の施設に質問紙を送付した。

- ・ 障害福祉サービス事業所
 - 生活介護 151件
 - 放課後等デイサービス 104件
 - 就労継続支援(B型) 37件
 - 就労移行支援 17件
 - 就労継続支援(A型) 16件
 - 児童発達支援 13件
 - 自立訓練(生活訓練) 9件
 - 施設入所支援 3件
 - 重症心身障害児施設 2件
 - 知的障害児施設 1件
 - 盲児施設 1件
- ・ 奈良県内の精神科クリニック・病院 64件
- ・ 奈良県内特別支援学校・学校 12件

返却率

52件回答／430件(有効回答率12.1%)

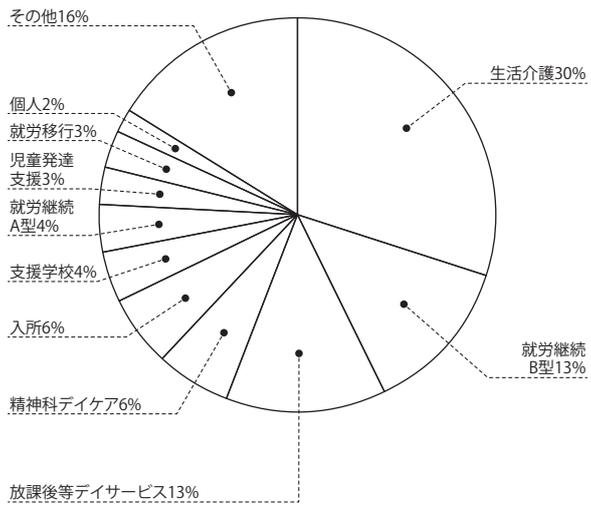
質問内容

質問内容については、質問紙を参考。質問紙は以下のものを使用した。

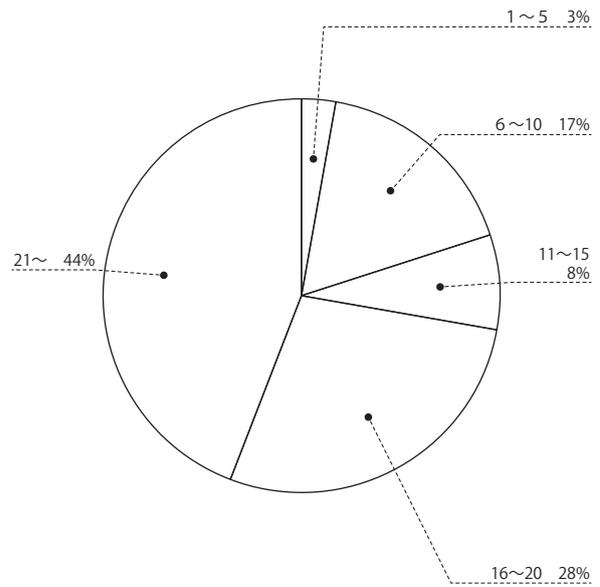
<p>01 基本情報 ※個人の方は、該当する項目のみご記入下さい。</p> <p>事業所名 _____</p> <p>記入者名(役職) _____</p> <p>住所 〒 _____</p> <p>電話番号 _____</p> <p>FAX _____</p> <p>メールアドレス _____</p> <p>※ 施設の場合は下記もご回答ください。</p> <p>サービス種別 _____</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20%;">利用定員</td> <td style="width: 60%;">利用者数、障害種別の割合</td> <td style="width: 20%;"></td> </tr> <tr> <td>利用者の年齢</td> <td>歳 ~ 歳まで</td> <td>職員数</td> </tr> <tr> <td>法人設立年、施設開所年</td> <td colspan="2">利用者の平均工賃</td> </tr> </table> <p>02 ご関心について</p> <p>芸術文化活動に関心がありますか。 はい / いいえ (_____)</p> <p>※理由をお聞かせください。</p> <p>実際に、何か芸術文化活動を行っていますか。 はい / いいえ _____</p> <p style="text-align: center;">1</p>	利用定員	利用者数、障害種別の割合		利用者の年齢	歳 ~ 歳まで	職員数	法人設立年、施設開所年	利用者の平均工賃		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> 芸術文化活動に関心がある方は、引き続き下記のアンケートにご協力ください。 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>現在、芸術文化活動を行っている方は</p> <p>(A)</p> <p>にご回答ください。</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>現在、芸術文化活動を行っていない方は</p> <p>(B)</p> <p>にご回答ください。</p> </div> </div> <p>03 現在の取り組みについて</p> <p>1. どこで、いつ / どのくらい、だれと、どんなことをしていますか。</p> <p>どこで(場所) 事業所・外部の教室、アトリエなど・自宅・その他(_____)</p> <p>いつ / どのくらい 毎日・週1回程度・月1回程度・その他(_____)</p> <p>だれと 事業所・ひとりで、家族・外部からの講師(アーティストなど)・その他(_____)</p> <p>どんなこと 絵画・陶芸・織り・木工・版画・パフォーマンス(音楽・ダンス・演劇など)・その他(_____)</p> <p>2. 芸術文化活動で重視していることはなんですか。 (例)自由に書くこと、創作の体験をすること、仕事につなげること、など</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>3. 芸術文化活動から生まれた作品を保管していますか。</p> <p>はい→どこに 家・事業所内(どこ _____)・その他(_____)</p> <p>はい→どういう状態で そのまま保管・額装して保管・その他(_____)</p> <p>いいえ→作品はどうしていますか。 _____</p> <p style="text-align: center;">2</p>
利用定員	利用者数、障害種別の割合									
利用者の年齢	歳 ~ 歳まで	職員数								
法人設立年、施設開所年	利用者の平均工賃									

<p>(A)</p> <p>04 現在の課題や必要としていることについて</p> <p>1. 芸術文化活動において、こうなったらいいな、これが知りたいなと思っていることはありますか。具体的におきかせください。</p> <p>・画材、道具、場所などについて (例)画材を買うお金がない、身体障害のある人が使える道具がほしい、など</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>・人材、制作・創作の専門的な技術や知識などについて (例)芸術文化活動に携わるスタッフがいない、施設内での理解を導くのが難しい、など</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>・販売(原画・商品化)、発表について (例)連絡のつけ方がわからない、どこで発表してもいいかわからない、など</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>・権利(著作権、著作権など)について (例)原画に無断で作者とどういった契約をしてもいいかわからない、アニメなどのキャラクターを模倣する人がいるけど黙殺してもいいかわからない、など</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>2. 上記の課題に対しての解決のヒントとなるような情報入手できるとしたらどんな方法がよいですか。</p> <p>ウェブサイト・メールマガジン・冊子・研修会 / セミナー・その他(_____)</p> <p style="text-align: center;">3</p>	<p>(B)</p> <p>03 関心のある取り組みについて</p> <p>1. どこで、いつ / どのくらい、だれと、どんなことをしてみたいですか。</p> <p>どこで(場所) 事業所・外部の教室、アトリエなど・自宅・その他(_____)</p> <p>いつ / どのくらい 毎日・週1回程度・月1回程度・その他(_____)</p> <p>だれと 事業所職員・ひとりで、家族・外部からの講師(アーティストなど)・その他(_____)</p> <p>どんなこと 絵画・陶芸・織り・木工・版画・パフォーマンス(音楽・ダンス・演劇など)・その他(_____)</p> <p>2. 芸術文化活動で重視したいことはなんですか。 (例)自由に書くこと、創作の体験をすること、仕事につなげること、など</p> <p>_____</p> <p>04 関心はあるが行っていない理由について</p> <p>1. 芸術文化活動を行うことができない理由について具体的におきかせください。</p> <p>・画材、道具、場所などについて (例)画材を買うお金がない、身体障害のある人が使える道具がほしい、など</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>・人材、制作・創作の専門的な技術や知識などについて (例)制作・創作活動に携わるスタッフがいない、施設内での理解を導くのが難しい、など</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p style="text-align: center;">4</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

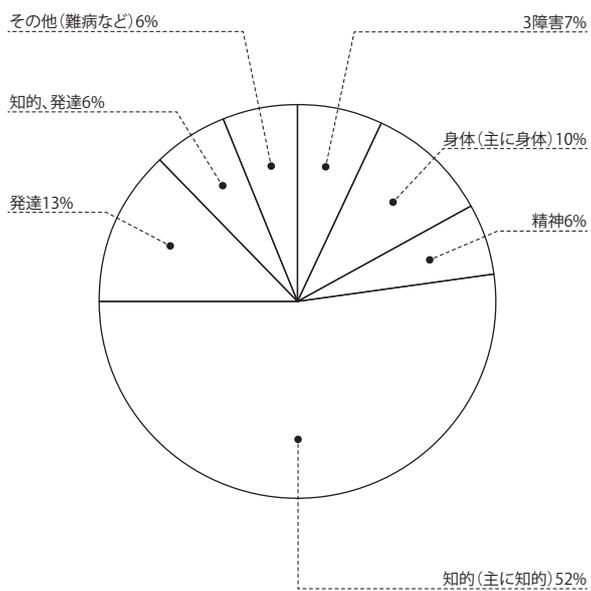
サービス種別



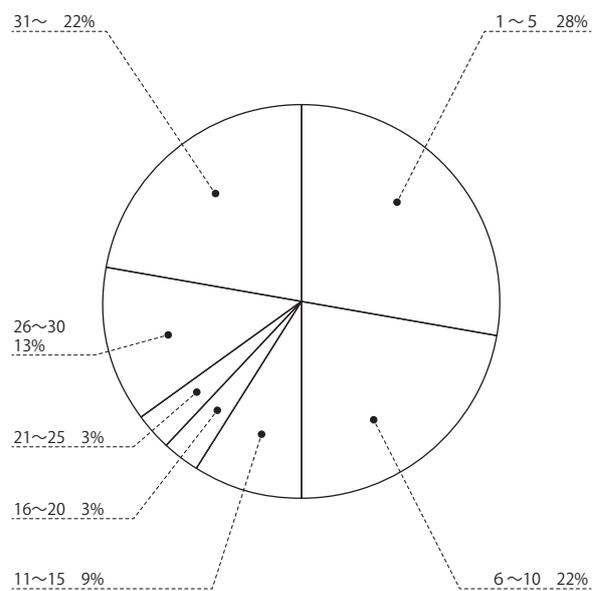
利用定員(名)



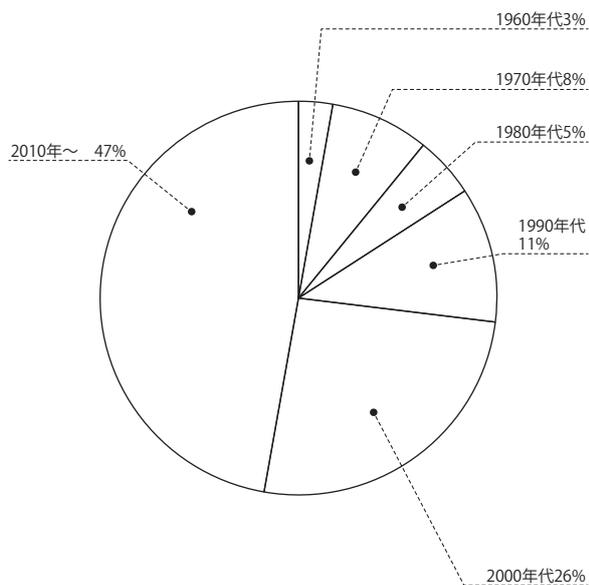
障害種別



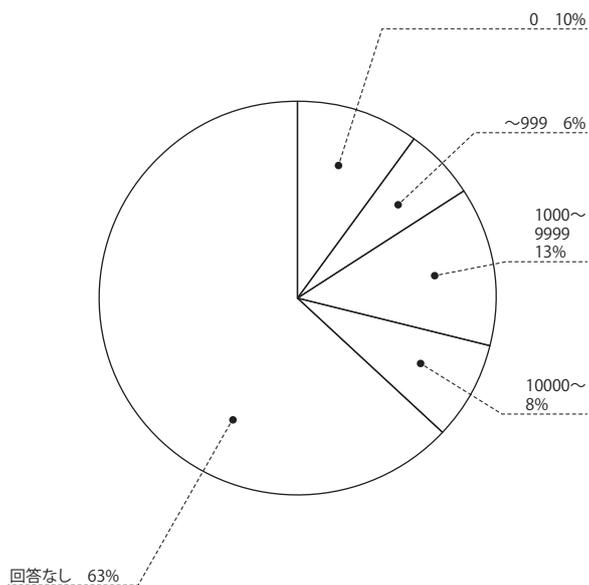
職員数(名)



施設設立開所年

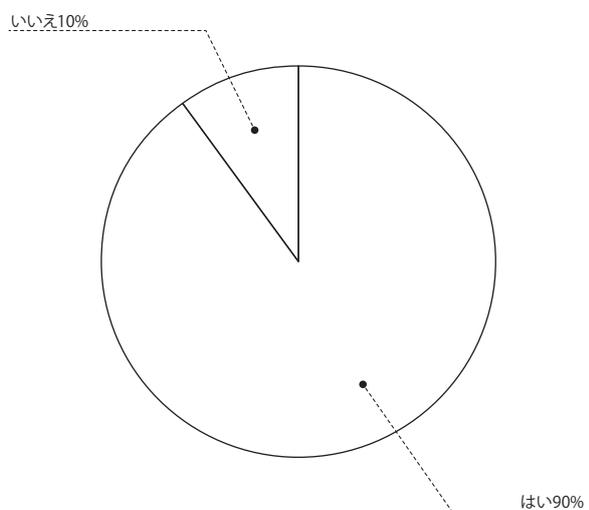


平均工賃(円)／月



02 芸術文化活動への関心

芸術文化活動に関心はありますか



「芸術文化活動に関心はありますか」に対する回答と理由(抜粋)

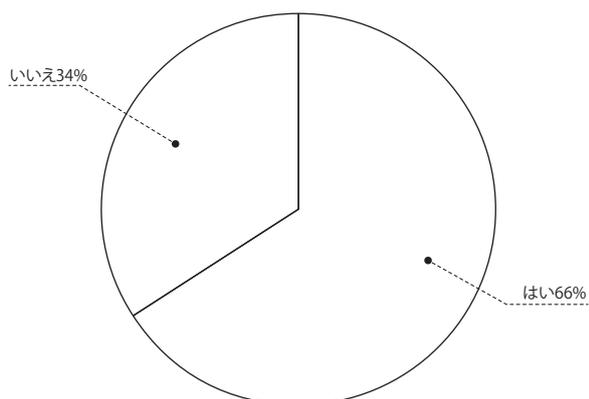
はい

- ・メンバー達の自己表現力を引き出す方法として
- ・自分の作品を世に発表したいため
- ・作者の自尊心向上と地域交流
- ・利用者の方にとっても生き生きと過ごせる時間になる
- ・芸術活動の好きな利用者がおられるため
- ・芸術活動を通して障害のある人の可能性が広がる
- ・働くメンバーが芸術活動を仕事にしているから

いいえ

- ・ビジネス展開を重点に考えている
- ・一般就労に結びつかなさそうである
- ・興味を示すメンバーが少ないため

芸術文化活動を行っていますか



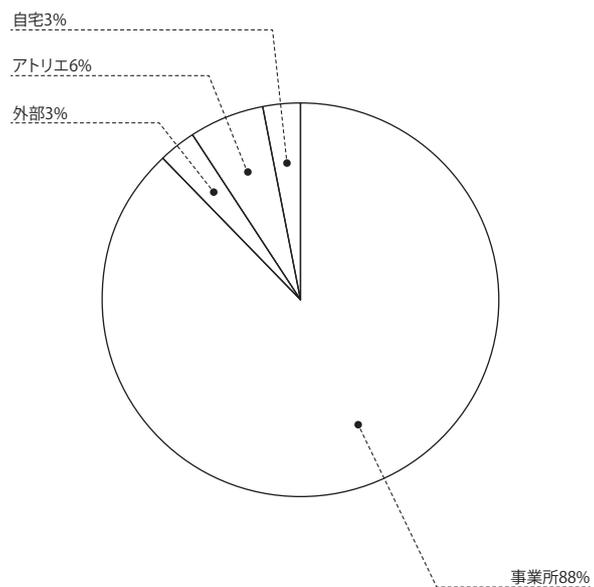


現在、芸術文化活動を行っている事業所

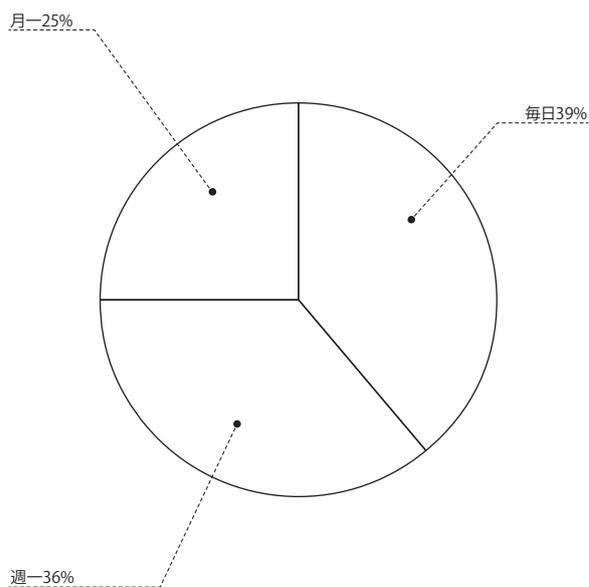
03 現在の取り組みについて

1、どこで、いつ／どのくらい、だれと、どんなことをしているか

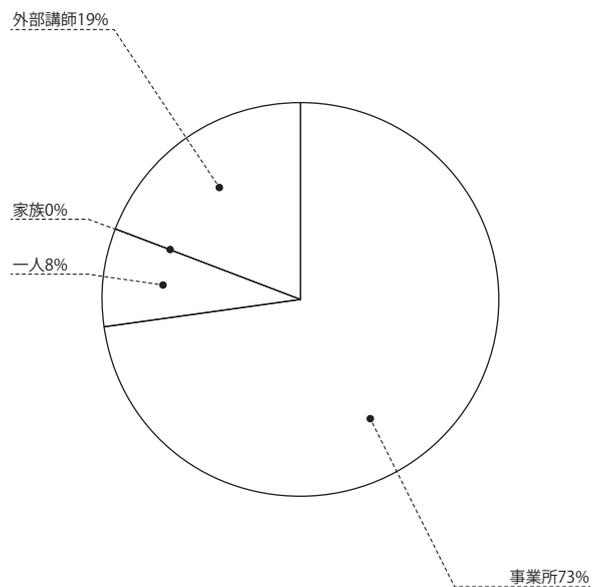
場所



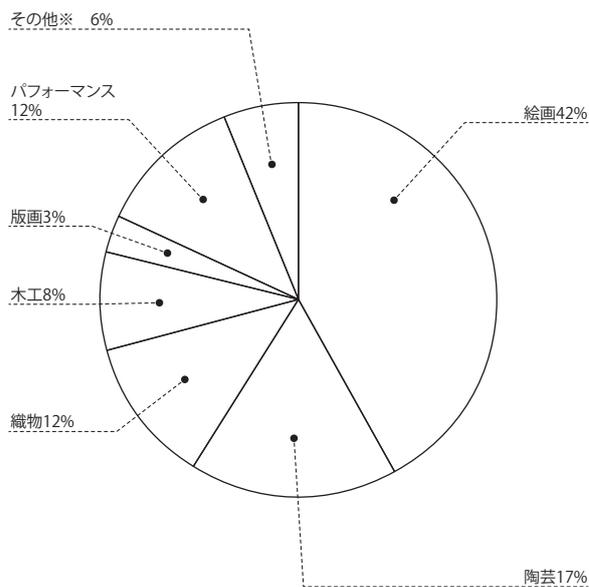
頻度



誰と



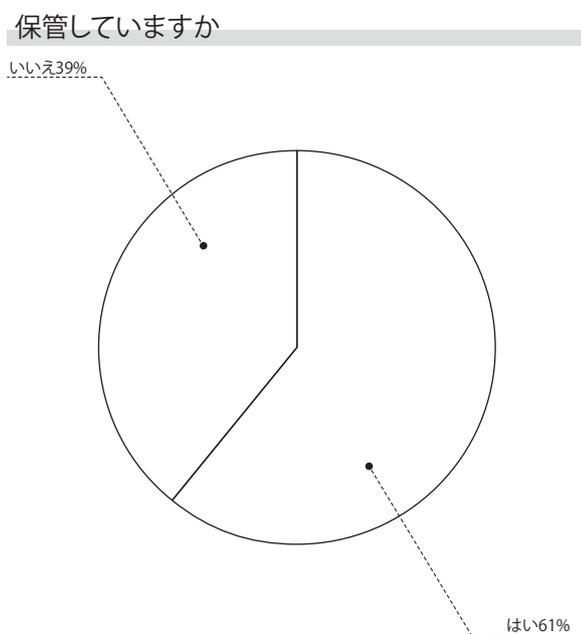
どんなことをしていますか



2、芸術文化活動で重視していること(数字は2件以上同様の回答のあった数)

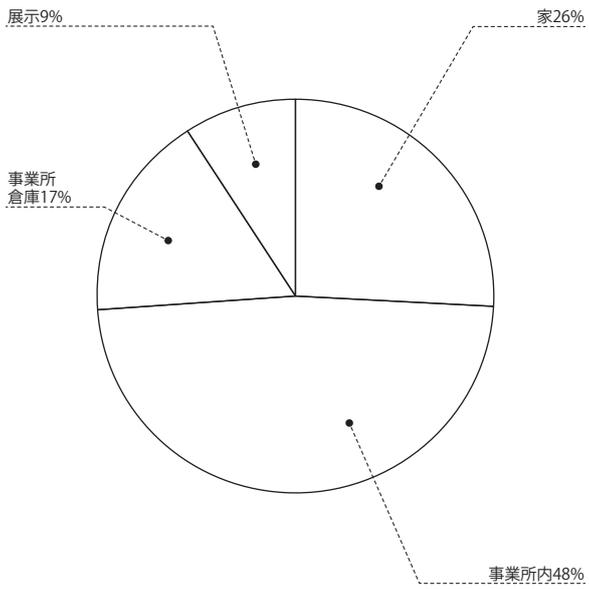
- ・自由に自己表現すること 15
- ・楽しく創ること 6
- ・余暇活動の充実 3
- ・商品になる物を制作すること。仕事になること 3
- ・様々な経験や体験の場となること 2
- ・興味関心が広がること 2
- ・制作した作品を通して色々な人とつながっていくこと 2
- ・芸術センスの向上 2
- ・利用者の方々がのびのびとその方の発想を最大限に活かせること 2
- ・発達の促進、手先を使うこと
- ・絵画やお習字を通して四季を間近に感じてもらう
- ・自信につなげる、達成感
- ・知識・教養としての美術や芸術活動について伝えること
- ・一人ひとりの個性を尊重すること
- ・職員も一緒に楽しむこと、刺激を受けあうこと

3、芸術文化活動から生まれた作品の保管について

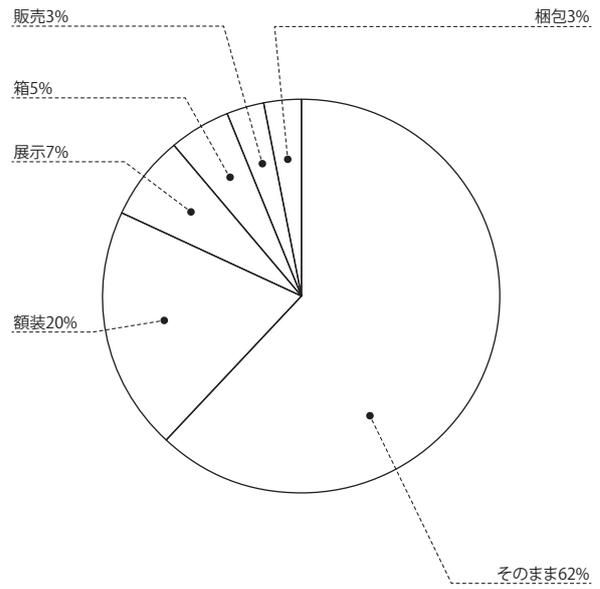


・回答が「はい」の場合

どこに保管していますか



どういう状態で保管していますか



・回答が「いいえ」の場合

一ヵ月ほど展示して各自が家に持って帰っている

04 現在の課題としていること

1、芸術文化活動において、こうなったらいいな、これが知りたいなと思っていること

○画材、道具、場所などについて

(数字は2件以上同様の回答のあった数、回答はわかりやすいよう、いくつかのテーマごとに分けた。また、自由記述については、似たテーマごとに分類、掲載している)

- ・画材や道具を買うお金がない、不足している 8
- ・保管面からキャンパス等の大きなものを買にくい
- ・その他

- 画材及び道具は基本的に事業所負担にしていますが、個人毎に提供するには費用がかかるため共同で使っています。どうしても安価な材料になってしまいますので、作品のクオリティに反映されます。
- 道具・画材は基本的に個人負担(購入)だが、ほかの施設や事業所はどのようにしているか。
- 完成した作品を額にいれるが(作品展等に応募)額が高額であるのが問題で、絵画の講師にその都度お借りしている。
- 鑑賞のためのキットを作ったりするための独自の予算がないこと。たとえば立体コピー用紙など。また3Dプリンターなども購入できると良い。

- ・職員が画材や道具をあまり知らない 6
- ・その他

- 絵の講師に教えてもらうまでは道具を買うことや、適した画材の選び方などわからなかった。
- 特別な画材を使わず活動していますが、メンバーが使ってみたい心をくすぐるモノが見つければいいとも思っています。
- 重度の知的障害がある方でも簡単に取り組み、なおかつそれなりの完成度のある作品作りの技術。

- ・場所がない 7

- 創作をするためだけの部屋はないためその都度準備、片付けが必要であり大変。
- 机の上での作品づくりではなく、車イスに乗りながらでも何か作品づくりができるスタンドなどほしい。

- ・大きな制作スペースが欲しい 2
- ・作品や画材・什器を保管できる大きな倉庫が欲しい 5
- ・絵画の保管方法(気をつけないといけないこと)を知りたい
- ・訓練施設であることから、退所(地域移行後)に継続できる場の情報が欲しい
- ・特に不自由していませんが、アーティスト(障害のある)が集うカフェなどがあれば嬉しい

○人材、制作・創作の専門的な技術や知識などについて

- ・ 専門職員(指導者)がない
- ・ メンバーの新しい表現がひらけるアーティスト、作品を保管(現物、データ化)する専門家、写真家、アートマネジメントの専門家がいたらうれしい

● 音楽・絵画については専門の講師が指導しています。取り上げる種類に依り外部講師を依頼したいのですが、場所費用の点で色々問題があり実現には至っていません。

- ・ 音楽や演劇など「本物」(生の演奏など)に触れる機会がもっとほしい
- ・ 芸術文化活動に時間をかける専任職員不足 5
- ・ 職員の知識、技術の不足 12

- 個々に、制作のやり方が違うので、それを見つけていくのに時間がかかるので難しいです。
- 自分で題をつけることができない(コミュニケーションが苦手な方)利用者の方には、職員が題をつけているがはたしてその作品にあったものになっているのか。
- グループでの活動といえば、貼り絵しか思い浮かばないので、グループで出来る創作活動などの情報や運営スキル。
- パソコンで絵を描く事を最近始めたが、手さぐりの状態でどのようにすればよいのかよく分からない(それでも、自分なりの描き方で少しずつ理解しながら、がんばって描いていきます)。

- ・ 専門的な技術や知識を学べる場がない 2
- ・ 研修に出かける機会を得ることも難しい(人的、時間的)
- ・ プロデュースや作品を世間に紹介してくれる人がいて下さればありがたいです
- ・ 一週間のスケジュールの中にたまに創作活動の日を設ける事はあるが、コンスタントに制作の時間はとれていない

- 余暇活動の一環という認識のほうが多いが、表現力を強める取組であることを知ってほしい。創作の専門性がどこまで必要で活用するべきか迷うこともある。
- 施設内での理解を得るのが困難。
- 一般的に芸術に対する理解は難しいものと思っています。少しずつ理解されていくものと思っています。

○販売(原画・商品化)、発表について

・価格の付け方がわからない 10

- 現在、販売活動(Tシャツ、陶芸など)を行っていますが、販売価格の設定が市場とマッチしているのかわかりません。
- 大きさや制作にかかった期間などをふまえて、なんとなく、でつけていますが、基準があれば知れたら、と思います。
- 利用者のイラストを使って商品を作った場合、どの程度の付加価値をつけて良いか迷います。またなかなか販売の場が少ないです。
- 職員は(現代美術系の)画廊等を見て作品価格をつける際の参考としている。色々考えはあると思うが、この世界の作品って全体的に価格が高いのではないかと思う。相手に所有してもらおうとなれば高すぎても安すぎてもいけない。難しいところです。
- 自分が正当な価格と思っていることが周囲から「高すぎる」といわれる。
- そこ迄の段階に至っていません。
- 作品が多くなれば考えたい。

・商品、作品がなかなか売れない 2

- 少量注文により、価格があがってしまい売れない。

・絵画などをどう商品化していくのかノウハウがわからない 4

- 商品化できればと思っているが、(デザイン)どう進めていくのかわからない。また、パンフレットを製作するとして、デザイン方法や印刷方法(業者発注)コスト面等がわからない。
- グッズ等、原画作品のデザイン化の知識がない。発表について、自分たちで企画して展覧会をするノウハウや余裕がない。公募展に参加するのが精いっぱい。

・発表場所がわからない。少ない 6

- 展示の見せ方について知りたい
- 子供たちがいろんな所で活動したり、出展できる場所があればいいと思う

○権利(著作権、著作権など)について

・契約の手法、内容がわからない 4

・権利についての知識がない 4

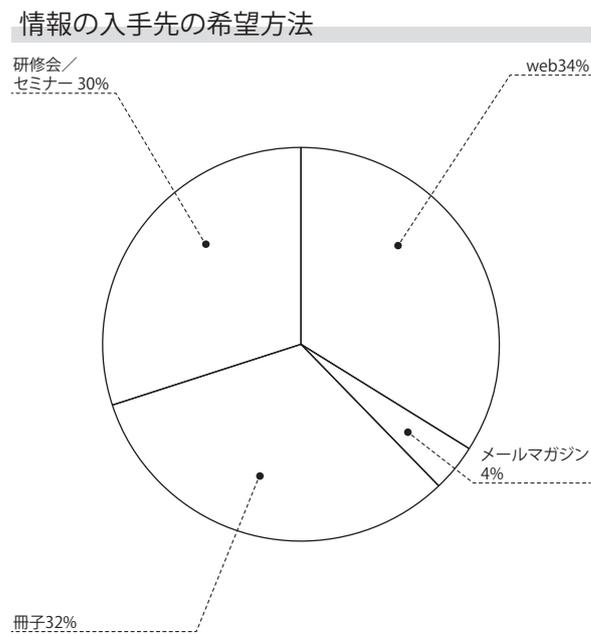
- 著作権や著作権などの知識を学びたい。
- 後見人についてなどの知識を学びたい。

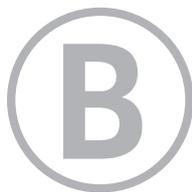
・発表の制限の有無など 3

- アニメキャラクターの模写などを展示会などで使用して良いのかわからない。
アニメのキャラクターを描かれる方がいらっしゃいますが、発表はできていません。絵の横に芸能人の名前や個人名を描く人がいますが、どうしてよいかわからず困ります。
- ネット上にある写真をトレースするのは違法ですか？

- ・児童の作品に個人名を出せない場合もある
- ・視覚障害者が鑑賞する権利といった面も取り組まれていくと良いと思われる
- ・販売は考えていない 2

2、上記の課題に対する解決のヒントになるような情報を入手できるとしたらどんな方法がよいですか。



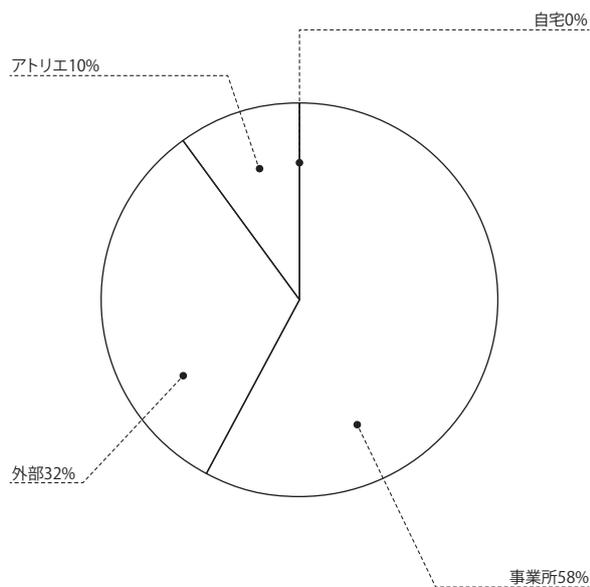


芸術文化活動を行っていない事業所

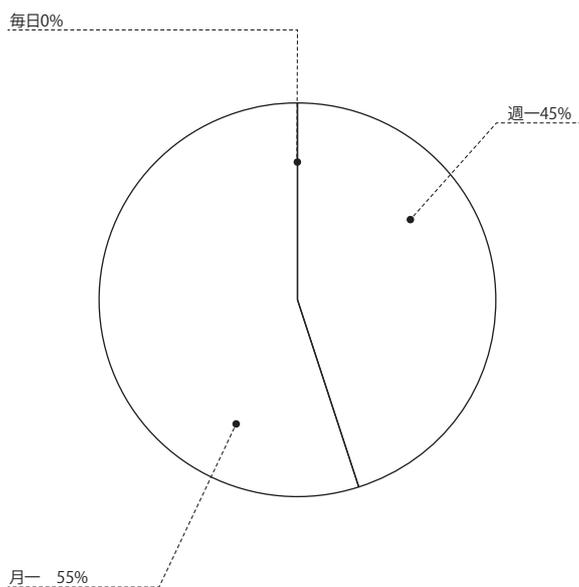
03 関心のある取り組みについて

1、どこで、いつ／どのくらい、だれと、どんなことをしてみたいか

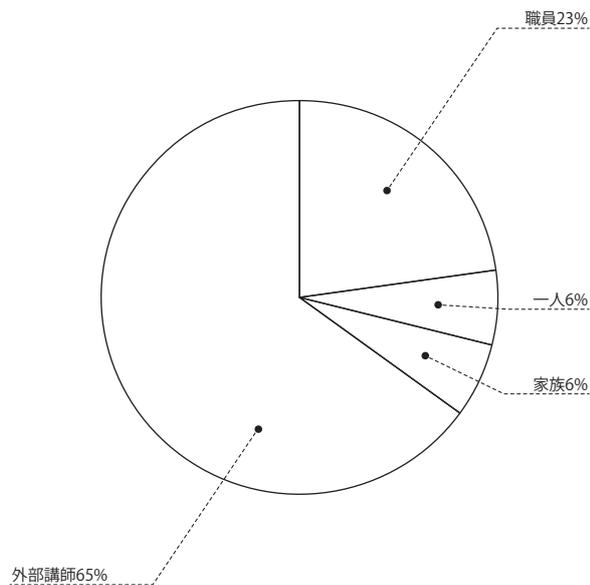
場所



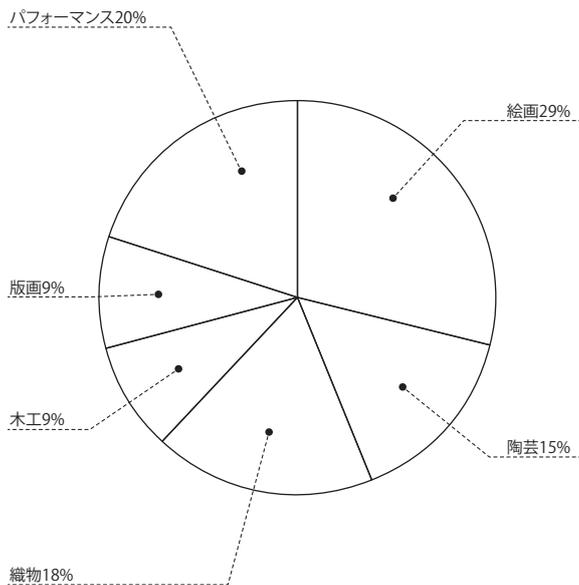
頻度



誰と



どんなことをしてみたいですか



2、芸術文化活動で重視したいこと

- ・自己表現 5
- ・コミュニティ作り 3
- ・余暇活動の充実、生きがいのため 2
- ・個性を伸ばす 2
- ・楽しんで出来ること 2
- ・当事者個々の希望に沿った提案ができれば 2
- ・プロのアーティストとのふれあい

04 関心はあるが行っていない理由について

1、芸術文化活動を行うことができない理由について

○画材、道具、場所などについて

- ・道具を購入する予算がない
- ・場所がない
- ・何をしてもよいのかあまり分らない。
- ・重度身障者の方が多く、サービス提供の中心は入浴、排せつ等の生活支援である 2
- ・将来の活動の中で実現していきたい 2

○人材、制作・創作の専門的な技術や知識などについて

- ・講師がいない 8
- ・施設プログラムに取り入れるための資金がない。
- ・職員の知識、技術不足 3
- ・製作活動もマンツーマンでの介助が必要な方が多く、職員が足りない。
- ・ネットワークがない 2

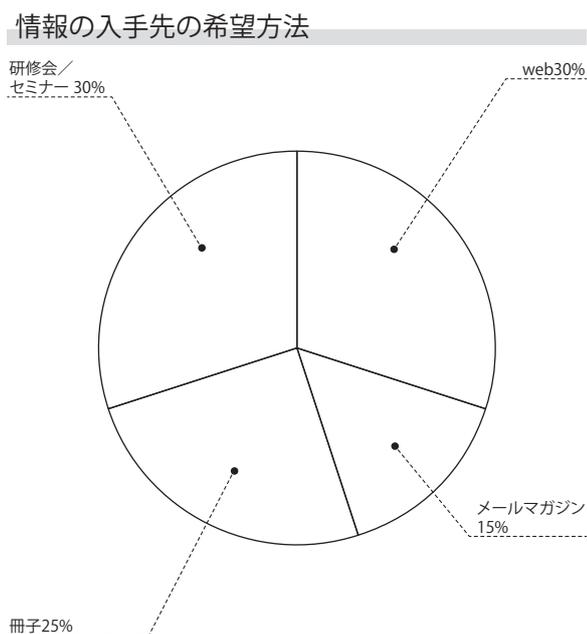
○販売(原画・商品化)、発表について

- ・どこで発表してよいか分らない 3
- ・作品の展示作業に人手を割きにくい
- ・ノウハウがない
- ・福祉大会で作品展示をしている。それに向けてできる範囲の作品づくりをしている
- ・施設では販売目的として何かは作っていない

○権利(著作権、著作権など)について

- ・知識、理解不足 4
- ・契約をどうしたらいいか。アニメなどのキャラクターを描いた場合に発表していいのか
- ・利用者が作成した作品は事業所が権利を持てるのか。どういった管理方法ができるのか

2、上記の課題に対しての解決のヒントになるような情報を入手できるとしたら どんな方法がよいですか。



05 奈良障害者芸術支援事業に期待すること(抜粋)

※ほかの質問に関連する回答については、該当する質問項目の回答としてカウントした。また、質問と関連のない回答は掲載しなかった。

- ・研修や施設見学等大変興味深く、コンスタントに、企画して行ってほしいです。また、それぞれの施設に、講師が出張して職員に研修していただくと、職員の意識も変わっていくと思います。
- ・芸術支援といっても分野は多岐にわたっているため、障害を持っている方にとって何が一番適しているのかを見極めるのが困難な状況です。また特性を見つけたとしても、その才能を伸ばしていこうとするには時間的経済的な余裕、また家族の理解も必要になって来ると思います。芸術支援事業において研修会や発表の場所等が提供されれば事業所独自で支援するよりは活動を広範囲に行うことができると思いますので、是非軌道にのせていただきたいと思います。
- ・通所している事業所ではなかなか芸術活動に取り組むことが難しいが、余暇活動として取り組む場と作品を発表する機会など個人レベルでもこういった情報を入手できるシステムを作っていただけたらと思っています。メーリングリストを登録するとこういった情報がそれぞれ登録している方に届いたり、相談窓口にお問い合わせると様々な情報を提供してもらえるようなシステムを作ってもらえたらと思います。
- ・アートに取り組んでこなかった施設のアート化について、現状の課題等を共有し、実現可能なかたちを具体的に考えていく手助けをしていただけたら嬉しく思います。支援者1人が取り組んでも困難であるため、この事業を通して法人全体にアピールできることを望んでいます。

2. 福祉サービス事業所、制作活動を行う個人へのインタビュー調査

1) 調査の概要

調査の目的

アンケート調査だけでは掘り取れない福祉サービス事業所の思いや悩み、ニーズなどを聞き取り、実際に調査員が現場に行って感じる雰囲気や関係性などと対比させながら、障害者の芸術活動を支援していくための課題を考察し、提言につなげ、調査によって見えてきた課題から、どのような事業行っていくことが現場のニーズにあっているかを考える。

調査期間

2014年10月～2015年1月

調査実施先

福祉サービス事業所15、個人5（うち、1名〔山口みづほさん〕は福祉サービス事業所へのインタビュー調査と重複）

インタビュー先	所在地	調査日
一般社団法人北和福祉振興一道会 みんなの広場らんまん	大和郡山市	10/29
社会福祉法人在友会 フレンズまきば アトリエ創佳舎	北葛城郡上牧町	10/30
社会福祉法人在友会 フレンズまきば ふらっぶ／ぼるか	北葛城郡広陵町	10/31
社会福祉法人以和貴会 ワークサポートセンター 今人 我楽／クラブ活動それいゆ	香芝市	10/31
特定非営利活動法人生活支援センターもちつもたれつグループホームまめはうす	大和高田市	11/ 6
特定非営利活動法人生活支援センターもちつもたれつ はればれ	大和高田市	11/ 6
宮本昭寿さん	桜井市	11/20
北口拓巳さん	奈良市	12/ 8
社会福祉法人青葉仁会 あおはにの家／萌あおはに	奈良市	12/11
特定非営利活動法人Msねっと	奈良市	12/11
特定非営利活動法人虹の家	生駒郡斑鳩町	12/18
社会福祉法人総合施設美吉野園 吉野学園 アートスペースくれよん	吉野郡大淀町	12/19
社会福祉法人総合施設美吉野園 大淀授産所（現わーくさぽーとPono）	吉野郡大淀町	12/19
合同会社しあわせ工房 ヨロコボ	奈良市	12/19
Aさん	奈良市	12/20
山口みづほ（ならやま会 いずみ園）	奈良市	12/24
社会福祉法人いこま福祉会 かざぐるま 創作クラブ	生駒市	12/26
山崎康史さん	橿原市	1/10
社会福祉法人大和郡山育成福祉会 ひかり園	大和郡山市	1/28

調査方法

おもに創作活動や作品を見学、芸術活動担当の支援者に1時間程度のインタビューを実施。質問内容は主に1の福祉サービス事業所へのアンケート調査での質問項目をもとに、創作環境、画材・道具の支援、人材、作品の保存・管理、発表、権利、運営費、創作にかかっている費用などについて質問した。またその他の質問は、その場に応じて柔軟に対応した。

調査体制

調査者がそれぞれの立場からの所感が求められるように、1調査先につき2～3名で調査を行った。アートやデザインのことに知識や経験がある立場の方も含めることで、たんぽぽの家の職員など福祉職とは異なる視点

に配慮した。調査者については、以下の通りである。

調査者 (50音順、順不同、各インタビューには調査者の姓のみ記載)
阿部こずえ(一般財団法人たんぼぼの家職員)、太田啓子(障害者福祉研究者)、岡崎潤(デザイナー)、岡部太郎(一般財団法人たんぼぼの家事務局長)、前川紘士(アーティスト)、宮下忠也(キュレーター)、森下静香(一般財団法人たんぼぼの家常務理事)、藤井克英(社会福祉法人わたぼうしの会たんぼぼの家 アートセンターHANAワークプログラムコーディネーター)、松本綾(社会福祉法人わたぼうしの会たんぼぼ相談支援センター相談員)

2) 結果

インタビュー先ごとにデータを作成し、本調査において特に関心のあった、以下のカテゴリーでまとめ直した。各施設の調査内容については、31ページ以降の個別データを参照。

1. 創作活動が始まったきっかけ、活動形態

- ・ たまたま絵のうまい利用者を見つけた
- ・ 利用者の絵が入選した
- ・ 利用者がもともと絵を描いていた
- ・ 利用者が絵が好きかもしれない、と職員が気づいたこと
- ・ 指導してくれる外部の講師がいた
- ・ 絵画の好きな職員がいた
- ・ 施設の方針で創作活動がプログラムに組み込まれた
- ・ 職員がアールブリュットやたんぼぼの家で行っているセミナーといったものへの関心があった
- ・ 「表現する」手段として
- ・ 陶芸は専門の職員がいる
- ・ 音楽は外部講師がいる

2. 創作活動の位置づけ

仕事

- ・ 仕事(活動)として、割り当てられた役割として行っている

仕事以外

- ・ クラブ活動、余暇活動として行っている
- ・ 他の活動の合間に行っている
- ・ 好きなことをしてもらう時間として行っている
- ・ 筆をもつリハビリ的要素
- ・ 個人の活動として行っている
- ・ 休日に個人で行っている
- ・ A型事業と創作活動を直接結びつけられてはいない。喫茶店で作っているサンドイッチやケーキにセンスを活かしてもらう

3. 画材

- ・個人(保護者)で用意
学校時代から使っていたものを使う
- ・利用者の積み立て、参加費・月謝の中から購入
- ・施設が用意、サービス利用料から購入
- ・職員が家からもってくる
- ・寄付に頼る
- ・講師と利用者との間に、職員が入って購入

4. 額の調達

- ・利用者の月謝から購入
- ・額を寄付してもらう
- ・以前の出展時に相手の方でつけてくれたものを使いまわしている
- ・施設内別グループで手作りしている
- ・職員の手作り
- ・職員が家からもってきた

5. 売買

販売している

- ・作品集を自費出版
- ・絵をカラープリンターしたものをはがきに加工して販売
- ・名刺とかポストカードとかポチ袋に加工して販売
- ・ビッグアイの価格表を参考にして値付け、販売
- ・8割掛けで販売

販売していない

- ・実績なし
- ・人にあげる

課題

- ・価格の付け方について、資格や制度をつくってほしい
- ・価格の付け方がわからない
- ・(障害者の描いたものだからと、)500円、600円と安くしてしまう。施設の考え方が古いのが原因

6. 発表

発表している

- ・事業所内での展示
- ・事業所のお祭りで展示
- ・市町の作品展で展示
- ・自宅ギャラリーで展示
- ・県内の一般も含めた作品展で展示

- ・インターネット、新聞、雑誌で調べて応募する
- ・たんぽぽの家関連のイベントで展示
奈良県障害者芸術祭、プライベート美術館、たんぽぽの家の展覧会で展示
- ・障害者アート展などに応募したり、自分で企画して展示
- ・個展を開催
- ・作品集、図録を出版、自費出版

課題、疑問

- ・公募も含めた発表場所の情報を知りたい

7. 保管

保管している

- ・自宅内に保管
ギャラリーを建てる、額装して保管、箱に入れて保管
- ・事業所内に保管
保管場所の例：額装して段ボール製カルトン、机、棚、段ボール、引き出し、利用者のロッカー、別の部屋、
倉庫
- ・データ化、ファイリングして保管

保管していない

- ・たまったので処分した
- ・立体は保管が難しく、家族が困っている。置いてあってもホコリを被った状態

課題、疑問

- ・本人が無頓着
- ・保存しているが、状態はあまりよくないかもしれない
- ・きちんとした保管場所がほしい
- ・地図をいれるような保管のためのものがほしい
- ・たまっていくので保管は難しい

8. 権利

- ・個人で管理、個人に帰属
- ・代金は本人にすべて帰属
- ・二次使用について口頭で本人、保護者に確認。使用料は払っていない
- ・二次使用について本人に許可はとらない

課題、疑問

- ・なぜ海外に出展するときは後見人が必要なのか
- ・著作権にまだ意識がない
- ・インターネット検索からプリントアウトしたモチーフを描いているため、著作権がどうなのか

9. その他

・利用者とのコミュニケーションの難しさ

- 途中でやめてしまう人にどのように提案すればいいのかわからない
色選びなどもしていいのか迷う
- 色選びをしているが、その色でいいのか迷う。本人がいやなら筆を投げるので、そこで判断をしている

・施設内での職員間のコミュニケーションの難しさ

- 販売する場合に、価格が高いと思われる場合があるので、販売はしていない。価格については、障害者が描いたものだから安くていいという意識が大きい。施設内で話し合う場がなくて、相談できる人がいない

・活動を発展させることと現状との間に生じる職員のジレンマ

- 職員が発表までもっていきたくらいけど、研修する時間がない

・仲間の必要性

- 具体的な目標があるポスターを作るなどして、サークルや集まれる場があるとうれしい

・今後目指していくところの曖昧さ

- どこを目指すのかについて悩む。商品化よりもまずは利用者の楽しみとか心の安定を目指したい

以上より、以下の課題が明らかになった。

- (1)利用者とのコミュニケーションの難しさ
- (2)活動を継続することの基盤の緩さ
職員や専門家などの人材不足、画材をどこから調達するかも含めた資金不足、アートの知識や技術、パソコンで加工するなどの関連技術を身につけるための研修機会の少なさ
→現場レベルでは、活動方針が悩みにもなっている。
- (3)作品の価格、活動の位置づけに決まった指標がない。
- (4)発表場所が限られている(発表の手段、方法についても情報を手に入れにくい)
→利用者の楽しみや自信につながっているので重視したい
- (5)他の福祉サービス事業所とのつながり、絵を描く人同士の集まりの必要性
- (6)福祉サービス事業所/職員の意識と社会の意識向上の必要性

3) インタビュー調査詳細

社会福祉法人青葉仁会 あおはにの家／萌あおはに

奈良市杣ノ川町50-1

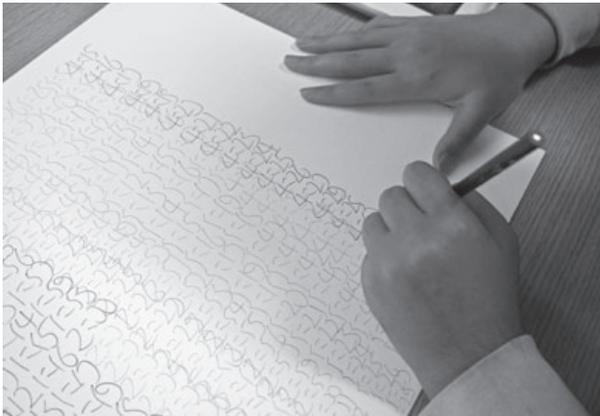
話し手: 中谷有香さん(アート部門担当)

調査日: 2014年12月11日

調査者: 太田、宮下、森下

[基本情報]

- ・サービス種別: 入所施設、生活介護 他
- ・利用者定員: 入所あおはにの家50名、萌あおはに50名、生活保護あおはにの家60名、萌あおはに60名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別: アート部門(アート班13名、クリエイト班21名、陶芸班20名)、知的障害
- ・利用者の年齢: 20~65歳
- ・職員数: アート部門(アート班2名、クリエイト班3名、陶芸班3名)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年): 法人設立1991年



現状

生活介護の日中活動という位置づけでアート部門の活動を行っている。他の班の方でも、絵を描くことが好きな利用者には、職員が声をかけて制作に誘うこともある。

画材は、職員が選び用意している。クレヨンや絵の具は保護者からいらなくなったものをもらうことも多い。画材の消費が著しい方については、保護者に相談し、個人的に購入し用意してもらうケースもある。

額は木工班で作ってもらったものや、頂き物を使用することが多い。展覧会での展示の際につけてもらった額をそのまま活用している。作品の扱い方や展示方法については、知らないことも多く、以前に他施設主催の展示の手伝いをした際に、初めて手袋をつけて作品を取り扱うことを経験し、勉強になった。

原画の販売は今まであまりしていない。作品をスキャナーで取り込みオリジナルの和紙にプリントしたポストカードなどの販売はしている。公募展は、社会に作品が出るきっかけとなり得るので、積極的に応募するようにしている。作品の出展依頼が来たら、法人内で起案を上げて進めていく。詳細が決まれば保護者にも連絡している。

作品の保管は机の下や、別の部屋に保管をしている。日々膨大な量の作品が生まれるので整理が出来ていない。

作品の販売価格設定には、いつも悩んでしまうが、大きさ、制作にかかった時間をふまえてつけている。

海外に出展した際、成年後見のしくみのことを知る機会となったが、まだまだ知らないことも多い。普段から、制作の様子をお伝えするなど、保護者と連絡を密に取るように心がけている。

所感

(太田)

あおはにのアート班で12～3年の職務経験のある中谷有香さんに話を聞いた。大規模入所施設を併設し、生活介護利用者のほとんどがそこに入所している。アート班の利用者13名のうち、入所は12名。

アート班では芸術活動以外に、羊毛を使った小物作りにも取り組んでいる。現在、作品の発表は、相手先から声をかけて事でもらうことで出展をすすめることが多い。また、コンクールでの入選が発表の機会につながっている。後見人制度や著作権・価格設定などについて課題を抱えているようであった。

アート班では利用者から利用者に声掛けが頻繁にあるなど、長い時間を一緒に過ごすうちにいい雰囲気がつくられてきたのだろうと思われた。利用者さんが気持ちよく快適に過ごせるよう、職員さんの意識づけがうかがえた。

(宮下)

藤田さんや若松さんといった、日常的に創作行為を継続しているメンバーに場所を提供するというスタンスのため、技術を教え込むことがなく自由な雰囲気がある。実際に、ここからは独創的な作品が数多く生まれ、評価もされている。創作のための安定した環境を提供することが出来ているが、作品の売買やデザインへの二次使用、著作権など、今後起こると予想される諸問題への準備は整っていないように感じた。

生駒市壱分町356-2

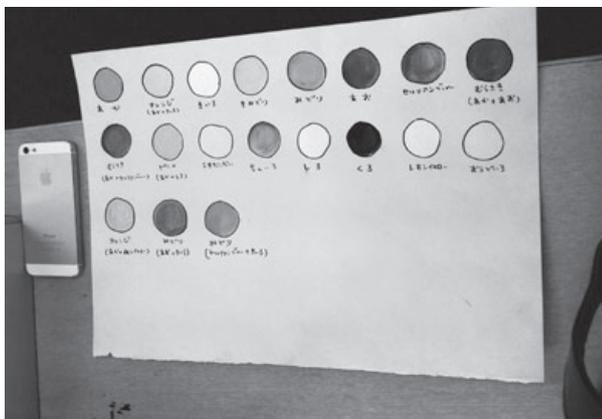
話し手:坂田和子さん(生活支援員)

調査日:2014年12月26日

調査者:太田、岡部、前川

[基本情報] (創作クラブ)

- ・サービス種別:生活介護、就労継続B型
- ・利用定員:希望人数アンケート調査による希望制で約18~20名程度(年に2回希望調査)
- ・利用者数と主な利用者の障害種別:12月26日は6名、知的障害(一部は身体障害)
- ・利用者の年齢:20代~50代
- ・職員数:メンバー数に応じて体制を決定(現在は2名常勤+2名非常勤+講師)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年):かざぐるまは2002年に事業開始、創作クラブは2013年



現状

かざぐるまにおけるアート活動は、次の2つがある。

①「創作の時間」:週に1回10:00~16:00の間で内容に応じて時間を設定。少人数制(1~2名)でアート専門スタッフと本格的にやりたいことを追及する時間。メンバーは主に講師が決定している。

②「創作クラブ」:第2第4金曜日10:15集合~11:30片づけ。半年単位で希望調査を行い、希望人数に合わせてグループを編成する(現在は2グループで各6~7名)。テーマは担当の職員と講師で決めている。テーマは季節的なものや、公募展などの内容に合わせて決定している。創作クラブはかざぐるまのリフレッシュメニューの位置づけ(その他音レク・エアロビ・カラオケ・ミニスポーツ等がある)で、250円の参加費をもらっている。画材費用と講師料は参加費と施設負担でまかなっている。

Tシャツやトートバッグの販売はショップや出店先で実施。デザインを使用する際には、本人と家族に確認し、その都度了承を得ている。

創作では色や絵具を選べる人、筆を持つことが難しい人など、さまざまなので、コミュニケーションをとりながら一人ひとりのことを知ることからスタートしている。活動では「楽しむこと」を主目的に、その人らしく表現できるかたちを模索している。

今後は陶芸・織り・詩・ダンスなど表現の幅を広げていくこと、ワークショップ開催、みんなで展覧会や季節の風景を見に行つて刺激を得るなど、より柔軟に展開できるよう考えている。そのなかで専門スタッフの確保、スキルアップを進めていく必要を感じている。

所感

(前川)

2種類ある「絵を描く機会」のうち、見学した「創作クラブ」の方は余暇的な位置付けだとのこと。講師以外にも数人の職員がサポートに入っており、参加者の普段とは異なる一面を共有する機会として機能しているようだった。毎回出されているテーマやモチーフは、描く事やコミュニケーションの「きっかけ」として設定されている。講師の塩入さんの話では、今後、立体制作や違う形でのワークショップ形式のもの等、今とは違う形の展開も視野に入れている様子。短時間で見た中では、余暇的な位置付けのためか完成までに当てられている時間がそう長くはないためか、成果としての作品単体からは特別に飛び抜けた印象は受けなかった。しかし描く様子を見る中で、制作が継続的に行われていることから今後どのような展開が生まれるのか興味を持った。

もう一方のプログラムも合わせた過去作品群をまとめて見た際には、時間のかけ方や集中力が他のものとは異なるように感じられる作品もあった。作品を見る限り、両プログラムとも作品のサイズや画材、アプローチが比較的似ている印象だったので、2つのプログラムの使い分けをより意識的に進める展開も可能だと思った。また、担当職員の方のモチベーションも高く施設の理解もある様子だったので、今後の活動の展開も見てみたい、と思った。

香芝市今泉451

話し手：岡橋三起子さん(支援員)

調査日：2014年10月31日

調査者：阿部、藤井、松本

[事業所の基本情報] (我楽さぼーと)

- ・サービス種別：生活介護
- ・利用定員：15名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別：11名、知的障害(自閉症が多い)
- ・利用者の年齢：18～46歳
- ・職員数：6名
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年)：法人設立1987年、今人は2003年、我楽は2011年

[それいゆの基本情報]

- ・活動者：7名(入れ替わりはあり。本人・保護者の希望)20代～46歳
- ・職員：岡橋三起子
- ・月謝(材料費)：当初は2500円で、2014年4月から5000円



現状

それいゆは今人、我楽の利用者のうちの、アート活動を希望する人のクラブ活動である。10年前にある利用者さんの絵が入選し、定期的に教えてほしいと言われたのがきっかけで始まった。参加は、今人の人がほとんどである。以前は、岡橋さんがボランティアで関わっており、利用者さんから材料費をいただいていた。その後、活動を安定的に継続し、講師にもきちんとお給料が出るようにと、利用者さんの月謝を2500円から5000円に上げた。誰もやめる人はいなかったが、授産活動の月謝から活動費を出している利用者さんもあるため、このまま進めるかは検討が必要と感じているとのこと。ただし、現状では材料費や出展料になっており、講師料はほとんど出ていない状況にある。

アート活動に参加しているなかで、自分の意思で行動できるのは2～3名ほど。自分でできる人はどんどんやってもらうが、いろいろ工夫が必要な人もいる。日々の行動からこういうことが好きなんだらうか、と見つけるのに時間がかかるが、保護者さんに写真を撮って渡すと、こんなことができるのかと驚きつつも喜ばれている。アート活動の中には、手を動かすというリハビリ的要素も含まれている。

画材や額縁は月謝で購入。作品は希望者には持って帰ってもらっている。施設外で発表し、売ればそのお金はすべて作品の制作者に還元している。

今後、作品をレンタルや販売に備え、価格をどうつけるかで悩んでいる。将来的に、こういう理由でこういう価格

がついているといった、客観的な説明ができる指標がほしいと考えている。

所感

(阿部)

アート担当の職員が地道に活動を支えていることがわかった。絵画クラブは、毎月3～4日、施設が休みの時を利用し、10年も活動されていることを聞いて驚いた。こうした活動のなか、公募展に入選することや展覧会の機会を得ていることが、利用者や保護者、職員自身にも励みにつながっているのだろう。一方、施設での日中活動の中でのアート活動は、もう少し療育的に捉え、手を動かし感触を楽しむことを目的としているという違いがあることがわかった。アート活動に担当以外の職員や外部のボランティアなどが出入りできるような環境になると、アート活動に関する悩みや課題が共有でき、さらに活動にも広がるのではないかと思う。

社会福祉法人在友会 フレンズまきば アトリエ創佳舎

北葛城郡上牧町大字上牧1878-1(たこやき味一内)

話し手:小野寺聡さん(支援員)、吉川圭子さん(支援員)

調査日:2014年10月30日

調査者:前川、森下

[基本情報]

- ・サービス種別:生活介護(アトリエ創佳舎)
- ・利用定員:10名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別:5名
- ・利用者の年齢:17~75歳
- ・職員数:1名(月1ぐらいで2名体制)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年):法人設立2004年、アトリエ創佳舎2011年



現状

アート活動をするようになったきっかけは、ある人の作品に迫力を感じ、コンクールに出したところ入賞したこと。活動の時間中には特に指導せず、何をしてもよく、自由に過ごしてもらっている。

一カ月の画材代は1000円。共同で必要なものは、毎月利用者からの積み立て金で購入。額や画材を地域の人や利用者の家族から寄付してもらおうこともある。使う画材は人によるが、一般の文具店で買えるものを使う人が多い。

展示は、最初に近くのショッピングモールで絵を持ち込んで交渉して、障害者アート展を開催した。最初の展示に人が集まったので、都市部でも開催するようになった。最近では公募展に入賞、入選したり大阪で個展をする人もおり、今後も諸々の発表を積極的に行いたいと考えている。

作品の保管については、たくさん描く人もいるので保存状況はよくない。

また、今年度は作品が売れた場合の収入は、すべて本人のものにした。価格設定については、一般の作家同様「駆け出しだから」と低めに設定している。

今後の展開としては、ゆくゆくは利用者のものでなく、地域に眠っている作品を見つけたいと考えている。

今後の課題は、もっと作品を知ってもらうこと。施設のある上牧地域は、奈良盆地でも都市部から離れているためか、なかなか注目されにくく、障害者アートに関心のある人が少ない。当然、施設全体で認識が向上しないのが現状である。まずは外部でその価値観を認めてもらうことで、本部や地域の認識を変えようとしている。

所感

(前川)

担当職員の小野寺さんご自身の美術に関する経験から、基本的な所を押さえたサポート・配慮が行われている印象を受けた。殊更特別な事ではないのかもしれないが、作品の裏に可能な限り制作年や名前を記入する、作品や画材を出し入れしやすい棚を制作空間に作っている、一部の作品は写真を撮りファイルに整理するなど、記録への意識がある点や、画材屋、ギャラリーなどの外部との繋がりも、小野寺さんがいる事で自然に出来ている印象を受けた。何らかの「美術に関する専門性」を持つ職員のいることの強みのようなものを感じた。

また、職員自身が事業所の立ち上げから間もない初期の段階で、近所のショッピングモールに展覧会の企画を持ち込み、交渉して地域の方に見てもらおう機会を実現されたり、利用者の高田千恵子さんの絵のキャラクターを引用した看板絵を建物の前面に大きく掲げられていたり(絵の下方には高田さんの絵からイメージを使用していることが記載されている)、建物そのものの持つ暗い雰囲気に対し職員と利用者の協力で壁画を描き解消して行ったり、という具合に、独自のアプローチも含め、有機的且つ積極的に出来る事を進めている様子。

(森下)

一番驚いたのは、アトリエ創佳舎という名前のとおり、常設のアトリエスペースとして設けられていること。また、ふだんは利用する障害のある人3名に対して、常時担当する職員が1名と週に1度かわる職員の2名がかかわっていることであり、一人ひとりの創作環境の準備やモチベーションの維持などが丁寧に行われていた。地域での展覧会や公募展への出展は積極的に行っており、事業所のある地域での発表にとどまっていない。展覧会のあるときには、必ず職員だけではなく利用者もともに見に行くということも、当たり前のことかもしれないが大切なことだ。現状として、アート活動と工賃を結びつけていないことで自由に創作できているということがある反面、販売などもふくめ対価に変えるということをほとんど行っていない。それによって額装の費用や展覧会費用なども捻出が難しい状況もあるのではないだろうか。

社会福祉法人在友会 フレンズまきば ふらっぷ／ぼるか

奈良県北葛城郡広陵町中127-1

話し手:財木善行さん(ふらっぷ／ぼるか)

調査日:2014年10月30日

調査者:前川、森下

[基本情報]

- ・サービス種別:生活介護(ふらっぷ／ぼるか)・就労継続B型(caféふらっぷ)
- ・利用定員:10名(生活介護)
- ・利用者数と主な利用者の障害種別:7～10名、知的障害、発達障害、(身体障害)
- ・利用者の年齢:ほとんど20歳前後
- ・職員数:不明
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年):法人設立2004年、ふらっぷ2012年



現状

景色のいいところで、新しくつくった建物で活動している。

午後の時間を、絵を描く時間として使っている。財木さんがぼるかで美術を行う事にしたのは、一つはアールブリュットやたんぼぼの家で行っているセミナーへの関心があったこと、もう一つに、これまでの児童との関わりの中で、「表現する」ということを忘れて欲しくない、という思いがあったから。

保管は、段ボールに入れているものと机にそのまま置いてるものがある。きちんと作品を保管するために、地図をいれるような筒のようなものが欲しい。

所感

(前川)

職員の財木さんがぼるかで「アート」を行う事にした理由に、「アールブリュット」や「たんぼぼの家のセミナー」のようなものへの関心があった事が一つ、もう一つに、これまでのご自身と児童との関わりの中から、「表現する」という事を今後も忘れてほしくない、という思いがあったとのこと。

ほとんどが「20代前半までの若い利用者」であることがこのスペースの大きな特徴。一つひとつの絵は、じっくりと描かれたものというより、短時間で即興的に描かれたもので、同じ法人内の40・50代の方の絵と比べると全く異なった印象。年齢や経験、発達段階などと、プログラムとの関係も、注意して見てみていてもいいかもしれない。

事業所としても若く、継続して行く中でまだまだ変化する余地がありそうだった。保護者の中には「若いうちには（「アート」だけではなく）いろいろな経験を積んでほしい」といった声もあり、それに応える形で午前中にある「作業訓練の時間」を作ったそう。

(森下)

できたばかりの事業所であり、平均年齢が19歳という非常に若い利用者たちであった。絵を描くことについても、動機や表現方法が定まっている人は少なく、絵の具の感触を楽しんだり、エネルギーを発散するのに色を塗っているような人も多かった。年齢的にも多くの方が成長期にあるため、当然だと思われる。一方で、スタッフのみなさんは、Tシャツを作成したり、グッズをつくるなど積極的にかたちにもしており、とても意欲的だと感じた。同じ施設内にカフェが併設されていたり、作業的なことも行われているため、その人の関心や能力の変化に応じて、自由な創作だけではなく、行程がはっきりとした仕事に取り組むこともできるため、いろいろな体験をしながら成長していくことができるのがいいと思った。

社会福祉法人総合施設美吉野園 大淀授産所(現わーくさぽーとPono)

吉野郡大淀町下淵1387-2

話し手:竹垣佳哉さん(管理者、サービス管理責任者)、高田美美さん

調査日:2014年12月19日

調査者:阿部、太田、岡崎

[基本情報]

- ・サービス種別:生活介護、就労移行、就労継続B型等
- ・利用定員:生活介護15名、B型25名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別:19名(生活介護)、15名(B型)
- ・利用者の年齢:20~61歳
- ・職員数:13名(うち、アート担当者は3名)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年):法人設立1948年、施設開所1982年
※2015年4月より「わーくさぽーとPono」に名称変更



現状

生活介護では日中活動として、肥料づくり、箸づくり、紙すき、アート、歌、ダンスを行っている。アート活動は2012年に、施設長の意向で新設された。今まで表現の手段がなかった人がアートで表現することで、行動にも影響するようになった。アートにしぼりはなく、アートの概念も広げていっている。

利用者の橋本哲也さんだけパーティションで区切って、他は大きなテーブルで作業している。2015年に、新しい建物に移る予定で、現在と同じように個別スペースと大テーブルで作業しようと思っている。利用者が自分で管理できるように、自分専用の棚とキャスターつきの入れ物があればと考えている。

画材は、年度初めに予算で購入。なくなれば保護者に購入をお願いしたり、絵具がなくなれば色鉛筆に変えるといった工夫をしている。費用の関係上、新しい画材などに挑戦はできない。

絵はコピーしてファイリングしてある。現物は段ボールに保管。本人の希望で家に持って帰りたときは持って帰ってもらうが、だいたい事業所においてある。

発表については、奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAのプライベート美術館や園の文化祭に出展。他の職員に出展するものを聞いたり、本人の希望で出展するものもある。公募展へはいろいろ出していきたいが、お金もかかるし、保護者の意向が強い部分もある。ただ、利用者にとっては自分の作品が人の目に触れることや、展示を見に行けるという良い面もあると感じている。販売については、名刺やポストカード、ポチ袋に加工している。ただし、二次使用について本人に許可はとっていない。今まで販売はしていない。

今後の方向性は悩む部分。商品化するかどうかなどは職員間で話すことはある。まずは、利用者の楽しみや心の安定が優先される。個々の職員の考えもあるが、職員側が利用者の能力を引き出せないなどのジレンマを抱え

ている。

所感

(太田)

2015年2月に新しい建物に移る予定。現在は古い建物で作業を行っている。作業場横には畳スペース(大きいのと1人寝れるぐらいのと)を完備し、体調が悪ければすぐに休めるようにしてある。1名だけパーティションに区切られた中で、そのほかは紙すき、アートなど広いスペースで行っている。アートは施設長の意向で2年前からできたメニュー。

ここでの作業はまずは、利用者の楽しみや心の安定ありき。次に「何を目指したらいいのか」と高田さんは言う。作品の発表にしても公募に出すかどうかは保護者の意向も強いという。「人に見られてうれしい。自分も見に行けるから」利用者が展覧会などに行けたらいいなと期待する。次の段階として、アートを手段にどうやって利用者を社会につなげていくか。いくつかの制約の中では限界もみえるのかもしれないと思われた。

また、名刺やポストカード、ポチ袋への2次使用はあるものの、吉野学園と同様、作品の積極的展開に苦慮されている様子が見えられた。

(岡崎)

アート活動は、新任の施設長さんの意向によって2年前に始まり、同時に配属になった若い担当者さんが、アート未経験ながら手探りで活動を進めてきたとのこと。まだ活動を始めて2年ではあるが、各自のことが良く考えられており、適切なコミュニケーションも行われている。中には魅力的な作品もあり、今後の発展が期待される。

作品は画像を作者別にファイリングしており、ダンボール箱を使って各自の作品保管場所も作っている。わからないながらも試行錯誤をしながら環境を整えてきたことを思うと頭が下がる思いだった。

ただ、アートの担当は実質1人で、相談相手も少ないため、悩みや不安も抱えながら活動しているようにも見受けられた。たんぼぼの家のセミナーやプログラムなどにも積極的に参加し、知識や経験を積もうと努力しているため、そういったネットワークから、悩みや課題の相談ができる環境やより多くの情報交換の場が広がってほしい。

施設の運営的には利用者さんの増員も課題だそうで、特に若い利用者さんに来ていただくためにも、アートなど多様な活動を取り入れようとする考えもあるようだった。アート活動による個々の尊重や社会との繋がりへの期待は、利用者さんにとっても価値が大きく、その施設を選ぶ理由になりうるのだということを改めて感じた。2015年2月より、新しい建物に移り、そこでは個別の棚や収納を設置して環境を整える計画だそう。新しい環境でどのように展開されていくか今から楽しみである。

また、古い建物も個人的には魅力的な空間に感じられた。制作スペース確保に困る例が多い中で、ここには水洗いできる広い土間の床があり、天井は高く、広く使いやすいような洗い場がある。大きな作品にも挑める、アトリエとしてはとても魅力的な建物である。新しい建物の竣工と共に取り壊されてしまうそうで、少し残念にも思われる。

奈良県吉野郡大淀町下淵1642-20

話し手：水口正憲さん(副主任生活支援員)

調査日：2014年12月19日

調査者：阿部、太田、岡崎

[基本情報]

- ・サービス種別：入所、生活介護、知的障害児施設等
- ・利用定員：入所、生活介護35名、知的障害児施設10名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別：35名(生活介護) 12名、知的障害者(アートスペースくれよん)
- ・利用者の年齢：7～54歳
- ・職員数：23名、実質1名(アートスペースくれよん)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年)：法人設立1948年、施設開所1975年



現状

吉野学園アートスペースくれよんでは、毛糸編みをしたり、和紙ではり絵をしたり、地図帳や車のカタログなど好きなものを見て絵を描いたりそれぞれのペースで自由な創作活動が行われている。アート部門として2010年から月に1回のペースで活動が始まった。アートスペースくれよんに来ることがまずは利用者にとっての目標。現在の職員体制は2名だが、シフト制なので実質1名で見ている。そのため、目が行き届かないこともある。今後は、アートを専門にしている職員の募集を検討している。

水曜日以外の13:00から15:00までだけがアートの活動時間で、本人がしたいことを気の合った人同士でパーティションで区切って、活動している。パーティションで区切ることで、集中して取り組めるようになった人もいる。1年に1回のバス旅行がテーマ探しの参考になったりした。

画材の購入は、生活介護の利用者の預金から出している。額やパーティションは手作りである。保管は、作品そのままの状態ですぐ箱の中に入れていく。

発表は、奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAのプライベート美術館で発表している。園の文化祭にも出展。

将来的には、作品を商品化できたらいいとは思っているものの、アプローチや手段がわからない。売上を伸ばしたいというよりは、商品化などを通して利用者の社会参加につなげたい。入所施設なので、生活の場所も活動の場所も一緒の生活になっているので、もっと社会の広さを知ってほしい。ただ、現状としてはわからないことだらけで、さまざまな研修に行ってそこで学んだことを現場で利用していきたい。研修については、どんな研修でも受けたい。アートには正解はないので見る感性を養うなど、いろんな作品を見たい。

所感

(太田)

4年前にできた新しいきれいな建物の中に、アートスペースくれよんがある。特性によって、また気の合う人たちで1名～4名ずつ、パーティションで区切って、本人のしたい活動をしている。

入所ということもあり生活のほとんどの時間を同じ場所で過ごしている利用者。「作品を商品化し、彼らの社会参加につなげたい。(でもその手段がわからない)」「もっと彼らに社会の広さを知ってほしい」と水口さんは語る。ただ、職員数が実質1名とギリギリの中でそういった願いはもちながらも、なかなか着手はできないのが現実のように感じた。

バス旅行などをしたことで、利用者がアート作品を「やらされてる感からニコニコしてやるようになった」。自発性や作業や仕事を「楽しい」と思えること、社会参加支援の原点がうかがえた。

吉野学園でのアート活動では、「本人のやりたいこと」が基本になっている。バス旅行をするなど、本人のやりたいことを広げていく取り組みもあるが、もともと選択肢の少ない障害者にとって今後、活動の幅をどれだけ広げていけるか、が現段階の支援の方向性のように感じられた。

(岡崎)

活動スペース自体は広いわけではなく、1～4人ごとにパーティションで区切られたスペースは、人の密度が高めにも感じるが、4年前にできたばかりというきれいな建物で、明るい大きな窓の外には畑や周辺の自然も見える居心地のいい空間だった。

担当者さん(実質1名)はアートの知識や経験はなく、担当に配属されてから手探りで活動を行ってきたようだが、魅力的な作品も生まれてきており、担当者さんの努力と柔軟な対応力を感じた。アート活動を進めてきた中で、これまで作業としてやらされている感があった方も、自発的にニコニコと活動に取り組むようになるなど、支援のあり方には好感が持たれた。魅力的と感じた作品たちは、最近になって生まれてきたばかりのものも多く、今後の発展が期待される。担当者さん自身も楽しみながら支援に取り組んでいる様子が印象的で、参加者の存在自体を愛し、活動で生まれてくる作品に素直に感動したり、純粹に色々なことを学び吸収していこうとする姿勢からは、アートの専門性よりも大切なあり方を感じた。

ただ、入所施設という新しい刺激が少ない環境の中で、制作の幅を広げていくことには課題がありそうだ。アートスペースくれよんに参加はしているが何もしていない人や、塗り絵をしている人など、まだきっかけを掴めていない人もいるようだった。個々に寄り添いながら、小さな発見を丁寧に喜んでいける体制をつくるためにも、職員の増えることが期待される。

活動が発展し、展覧会や商品開発などといった新たな展開を考える時には、より高い専門性が役に立ってくるように思われる。アートを専門にした職員の募集も希望されていたが、どのように募集したらよいか困っている様子で、求人の方も含めたアドバイスなどの協力も考えていければと思われた。

また、求人以外にも予算や作品保管管理のことなど、よく耳にする困りごとでも話されていた。個別の状況に合わせた改善策を考えられるよう、施設の担当者同士が情報交換をできる場づくりやネットワークの構築の重要性も感じた。

大和郡山市矢田町字大谷382-2

話し手: 竹内聖典さん(統括施設長)、堀尾直人さん(副事務長、絵画担当)

調査日: 2015年1月28日

調査者: 太田、藤井、前川

[基本情報]

- ・サービス種別: 生活介護、就労継続B、就労移行
- ・利用定員: 50名(生活介護)、10名(就労継続B型)、6名(就労移行)
- ・利用者数と主な利用者の障害種別: 64名(知的障害が多い)
- ・利用者の年齢: 18~61歳
- ・職員数: 30名(うち正規職員が10名)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年): 法人設立1993年、施設開所1994年



現状

毎週月～金曜日、9:00～16:15の間、7班に分かれてそれぞれの活動が行われている。利用者のほとんどが自宅から通っていて、法人内のグループホーム利用が10名。創作活動は水曜日13:00～15:00に余暇活動(生活介護とB型の希望者)として行われている。活動の内容は音楽と書道と絵画。音楽は30名ほどで月3回、書道・絵画は3名ぐらいつつで、月1～3回。

音楽はマリンバ奏者の松本真理子さんや数人の外部スタッフが指導、書道や絵画などはその分野が好きな職員を中心に活動が行われ、その職員の異動や退職などで自然消滅してしまうことも多い。書道・絵画は2014年の春から始まった。

音楽だけは開所当初から講師がいたり、年2～3回、発表の場としてのステージもあったために、今まで続いている。継続することで、利用者が自信をもってくる。一人ひとりにスポットがあたるようにというのが、余暇活動の原点でもあり、目標としているところである。

絵画の時間は、モチーフは職員が決めているが、自分で決めて描く人もいる。途中でやめられないからその日に描く枚数を決めて絵を描いている人もいる。宮下あつしさん、白男川さんは自分の関心のあるものしか描かない。調子の悪いときの方がよく描くのは、自分を落ち着かせるためのようだ。

画材は職員が調達している。質よりも安さで選んでいることが多い。今後は、画用紙だけではなくてパネルも使ってみたいと考えている。特別なことがない限り施設のお金で購入され、額は職員の家にあったものなどを使用している。

絵に関しては特に決まった発表の場はない。職員がそういう場を作れていないとも感じる。保管については、施設内で飾ったり、一部は日付をつけてファイルに入れて保管している。絵画担当の職員は、将来的に描いたもの

を本にまとめたり、チラシの絵に使ったりしたい。描いたものはその日にカラーコピーして、保護者に渡している。売るといのは今のところ考えていない。利用者個人個人にスポットが当たればいいと思っている。きちんとした画廊などで展示して、見た人が元気になったり、評価されることを期待している。

所感

(太田)

活動時間や時間外における職員の対応の仕方や会話のやり取りなどから、職員と利用者さんとの距離が非常に近い施設であると感じた。知的には比較的重度の利用者さんとの間に心地のいい空気感があり、利用者さんの自由な表現が生み出されているように思われた。

ただ、余暇時間内の音楽に関しては開所当初から松本真理子講師との結びつきがあったために持続し発展してきた経緯はあるものの、書道にしても絵画にしても「ちょっと好きな、得意な」職員がいるときに偶発的にできたもので、異動などでいなくなってしまうとクラブ自体の活動もなくなったりするため、継続という意味から考えるともったいないと思われた。改めて利用者さんのニーズをどういう形で満たせるのか考えるきっかけとなった。

(藤井)

自然ゆたかなロケーションの中に施設があり、ゆっくりとした時間の流れを感じた。訪問時のプログラムは、全体がレクリエーションとして音楽、絵画、趣味の時間として活動が行われていたが、メンバーや職員の根底には自分を素直に表現することの楽しさを実感しているように見受けられた。

その背景としては、開所当時から音楽プログラムの継続によって、自己主張する面白さ・人に魅せる／見られる快感・他の人とのコミュニケーションなどが開花できるベースがあるように思った。

また、施設長の武内さんや事務員さんなど、職員もともに表現活動を楽しむという姿勢があることが、全体の空気感により影響しているといえるのではないだろうか。メンバーに寄り添うケアの視点・意識がしっかりとされていることで、個々の個性や考え方を育てているように感じた。

(前川)

施設長と利用者の方のやりとりを初め、職員と利用者の距離が近く、良い印象を受けた。

「音楽のプログラム」は外部から専属的に関わられる講師を招いて長期継続して行われており、他のプログラムは内部の職員が、その都度の利用者の方のニーズと施設側の都合の兼ね合いの中で行われている。長期間行っている「音楽のプログラム」があることが良い影響を与えていると思う。外部からの講師を招く事が、安定したプログラムの提供の確保につながっている。現在の所ボランティアという形で招いており、予算の中に組み込むという所までは行っていない、とのこと。

また、施設としての表現プログラムの「継続」を考える際、コンサート等の「発表の機会」の有無といった眼に見えやすい目標が、施設が表現活動をプログラムの中に継続的なかたちで組み込む際のひとつのポイントになる、と感じた。

一つの施設に新しい展開が生まれ、それが定着する状況や仕組みを、「どのように作るのか」ということを考えることが重要なポイントではないか、と今回の訪問の中で改めて感じた。

今回の見学の中では、白男川さんの「トイレや、パンについての独り言」のような絵に興味を持った。電車のモチーフや画面を埋めて描く特徴が見られる為か、職員の方の作品を説明する言葉の中に「自閉症の人の典型的な～～」といったニュアンスを感じた。「量やペース」「細部の違い」や、「描かれるまでの背景」などの関係を見直す事で、現時点では見えて来ない事からも新たな発見の可能性はあると思うので、最初の特徴やキーワードから見方や関わり方を固定するのではなく、新たな眼で見直す、あるいは新たな眼に触れる機会を確保できるといいと思った。

特定非営利活動法人Msねっと

奈良市法蓮町433番地1 グローリー新大宮 1階

話し手:北島真理さん(代表理事長、企画コーディネーター)

調査日:2014年12月11日

調査者:太田、宮下、森下

[基本情報]

- ・サービス種別:就労継続A型
- ・利用定員:20名
- ・A型雇用者数と主な利用者の障害種別:15名、発達障害(中村あいさん)等
- ・A型雇用者の年齢:18~62才
- ・職員数:13名+2名(サービス管理責任者管、代表)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年):法人設立2010年



現状

A型事業所として、喫茶店、雑貨販売を行っている。A型雇用者の芸術活動に対する直接的な支援は行っていない。A型事業と芸術をどう結び付けるかというのに悩みがある。事業所の収入源として絵を使うのは難しいが、現在は喫茶店でサンドイッチやケーキづくりや盛りつけにセンスを活かしている。絵を売らないといけないと思わなくてもいいのでは、と考えている。そのほか、事務所の壁画を自分たちで考えて描いたりポップを作ったり、新大宮と高の原にある事業所のギャラリーで作品を展示したりしている。

法人内の放課後等デイサービスの方で子どもに教えることもある。自分の気持ちを伝えるための表現活動として、月に2回、造形の講師が来ている。障害があるとかないとかではなくて、絵がいいと人に褒められて、自信につながった利用者もいる。

代表の北島さんとしては、彼らが働いた給料で画材を買って、絵を描いたりしてくれたらいい、さらにいろんな人とつながって世界が広がればいいとの思いがある。事実、A型雇用されている切り絵作家の中村あいさんは、作品集を自費出版している。

中村あいさんは切り絵を昔はノートに挟んでいたが、いまはファイルに入れて、基本的には家に置いて保管している。

以前は事業所として中村あいさんと一緒に何かをするということも考えたが、それは中村さんの中で混乱につながるということがわかった。そのため、今後コラボすることがあれば、デザイン料を払って契約する、という話し合いが行われた。

所感

(太田)

Msねっとでは、A型事業所として喫茶店を運営、他に子育て支援の事業も行っている。芸術活動を行うA型雇用者(利用者)もいるが、事業運営の中でA型雇用者の芸術活動を支援しているわけではない。ただ、彼らが事業所の内装などに絵を描いたり、作品を展示するスペースとして事業所があったり、側面から間接的にかちりと支援しているようにうかがえた。その背景には、「彼らを社会と繋げる」という北島さんの考えがある。また、喫茶店で販売しているサンドイッチにも彼らのセンスが役にたっているとのこと。

「彼らのアートをなんとかしようというのはできないけど、ネットワークの中で彼らを社会につなげていっている」。代表の北島さんが言った言葉にMsねっとの事業理念が象徴されているように感じた。「認められるという経験」。それは、障害者が支援者だけではなく、社会のあらゆる人から認められるということ。そういったチャンスをつくる、という支援者の徹底した立ち位置によって、芸術活動を行い、当日話の聞いた中村あいさん(切り絵作家)は自己を解放できるようになったのだろうかと思われた。

(宮下)

メンバーにA型の仕事ができる人が多いため、それらの人たちの訓練を第一に活動している。なかには個人的に絵を描いたり、切り絵をしている人たちがいて、その人たちの特性を生かすためアートを活動に取り入れたいという意向は持っている。具体的には、Msねっとの経営しているカフェのメニュー表や雑貨屋のポップの作成などで実践されている。この施設には、児童保育所も併設されていて、そこでは情操教育としてのアート活動がされている。そのためアートに対する許容度は高い。

大和高田市内本町6-18豆の木ビル

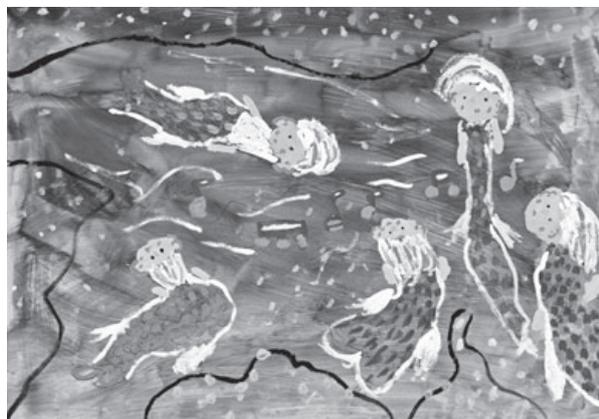
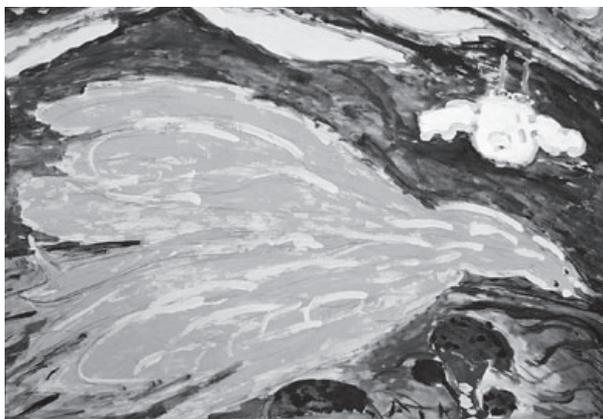
話し手:大竹晶子さん(グループホームサービス管理責任者)

調査日:2014年11月6日

調査者:岡部、宮下

[基本情報]

- ・サービス種別:グループホーム、ケアホーム
- ・利用定員:9名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別:最高は区分4
- ・利用者の年齢:26~59才
- ・職員数:全体27名、グループホーム7名
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年):法人設立2006年、グループホーム開所2008年



現状

グループホーム利用者のココル185さんが施設内で初めてアート活動を始めた。ココル185さんは7年ぐらい前から一般の教室に習いに行っていた。最初の講師が個展を開かせてくれたり、作品展に発表させてくれたりしたのをきっかけに才能が開花。個展を開かせてもらったのは、ココル185さんの中ですごく自信になっているようだ。また、違う講師にも習いにいったら、どんどん変わっていった。アクリルなど画材の変化も見られた。

費用については、ココル185さんは月謝を払って習いに行っている。画材は一部自分で購入。自分で購入すると、100円均一に買いに行ってしまうので、講師との間に職員が入っている。

保管、売買に関しては、本人はあまり関心がない様子。絵が売れたことはない。もし、売れたらその取り分はすべて本人のものになる。

奈良県と高田市の作品展で発表した。たんぼぼの家のプライベート美術館や高田市の一般の作品展に応募している。もっと作品の発表の場がほしい。

所感

(岡部)

職員の話から、表現活動だけではなく、生活全体をどう支えるかという視点での支援を重視していることが伝わってきた。

地域のアトリエや別の事業所とうまく連携し、協力関係を築きながらサポートしているのも特徴的。施設内で作品を展示し、ほかの利用者や来客にも説明をしているのが印象的だった。

決して絵がうまくなることだけを目的をせず、自己選択や作品をとおして振り返ることなど、アートを通して人として自立していくためのポイントを押さえていると思った。

(宮下)

ここには、自発的に表現活動を継続しているココル185さんが所属している。アットホームでおおらかな雰囲気のある施設で、施設長および担当職員がココルさんの良き理解となっている。表現をおこなうというココルさんの特性を、どうにかしてお金に変えようとするのではなく、ひとつの個性として受け入れその良さをあたり前のこととして評価し、応援しているという自然体のスタンスには好感が持てた。担当職員が、ココルさんが言われたくないことを施設側の要求としてどうしても伝えなくてはいけない時、当人のプライドを傷つけないように迂回した表現を心がけている、と話していたことが象徴的だった。施設全体に漂うアットホームさは、このような職員のスタンスに由来するものなのかもしれない。

特定非営利活動法人生活支援センターもちつもたれつ 生活介護はればれ

奈良県大和高田市池田418-1 大和高田市総合福祉会館2階

話し手：竹田浩康さん(サービス管理責任者)

調査日：2014年11月6日

調査者：岡部、宮下

[基本情報]

- ・サービス種別：生活介護
- ・利用定員：20名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別：10～13名、障害種別：知的、精神、身体
- ・利用者の年齢：19才～64才
- ・職員数：全体27名、生活介護12名
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年)：法人設立2006年、施設開所2010年



現状

2010年頃から日々の活動の中で、アート活動を選択して取り組めるようにしており、毎日絵を描いている人もいます。2014年春から、養護学校の元美術教諭を講師として迎え、週1回絵画教室を開き、技術や画材について専門的なアドバイスを受けて活動に取り組めるようになった。画材は、利用者の身体状況等に合せて、できるだけ施設で揃えるようにしている。学校時代からずっと使っているものを持ってくる利用者もいる。

現在の課題は、利用者の絵をどう伝えていくか。利用者が外の人とつながれる仕組みをつくりたい。今後は絵だけでなく創作で作ったものも展示もしたい。

発表は、施設内に展示をしたり、市の作品展に出している。県内のありとあらゆる作品展に出していきたい。発表して、見てもらうことによって、描き方にも変化がでるのではと感じている。保管は、新聞紙ではさんで重ねて、それぞれ各自のロッカーに保管、または持って帰ってもらっている。

今は楽しみが優先で展示で見てもらうことを優先している。

所感

(岡部)

外部講師が決して押しつけをせずに、当事者のペースや主張を尊重しながら見守る姿に好感がもてた。時間と場所の制約から利用者が同じ画材やモチーフを使用しているが、興味のある利用者は時間外でも描いたり、こだわりのある人は別の作業をしていたりと、個別の対応も柔軟なように思えた。作品も充実してきており、今後は別々に芽生えてくる表現の個性をどうのばすか、いかに外に発信していくかが課題と感じた。場合によっては講師を複数にしたり、ボランティアスタッフなど、外部の人間を入れると、今後の展開につながるのかもしれないと思った。

(宮下)

今年から元養護学校の美術教諭を講師に、アート活動を本格的に開始した。まだ始めたばかりの活動ということで、リスクのある絵具や材料の手配が煩雑な立体造形には手を出さず、画用紙に色鉛筆もしくはペンといった限定された画材で、草花や野菜などの典型的な題材を描かせている。養護学校時代の教え子がいることもあり、指導者とメンバーたちの信頼関係がすでにできつつあるように感じた。今後活動を続けるなかで各自のやりたいことや主張が明確になれば、充実した作品が数多く生まれてくるように思った。

特定非営利活動法人虹の家

生駒郡斑鳩町龍田2-3-12

話し手：吉村文男（施設長）

調査日：2014年12月18日

調査者：岡崎、岡部、宮下

[基本情報]

- ・サービス種別：生活介護
- ・利用定員：20人
- ・利用者数と主な利用者の障害種別：13名 肢体不自由
- ・利用者の年齢：22～64歳
- ・職員数：7名
- ・施設の沿革（法人設立年、施設開所年）：法人設立2007年



現状

虹の家は、斑鳩町に子どもたちが毎日通って夢を持って活動できる場が欲しいという、母親たちの気持ちから活動が始まった。メンバーの特徴を活かして自由に活動している。絵画及び創作活動は立ち上げ当初の2007年から始まった。

創作活動の時間は月1回。絵画以外に陶芸や書道、ミュージックベルの活動も行っており、それぞれ講師（陶芸5名、書道1名）が来ている。絵画は、講師（近隣のボランティア3名）が来ている。作品のテーマはそれぞれ本人の要望を聞いてモチーフを描いている。個々に角印を作っており、作品に押している。色を作ることが自分のできない人には講師が作るが、もっと本人の主体性で描いてほしいと、施設長は期待する。

画材は施設側が用意しており、講師が画材屋さんで購入。皆が同じ固形の水彩絵の具を使用している。今後は、もっと筆以外の面白い道具が使えたらいいと施設長は思っている。

いかるが公民館祭り、いかるが芸術協会展に出展。アールブリュットの公募展にも応募している。出展する作品は講師と本人で決める。

作品はまとめてダンボール製カルトンに保管。額装は職員で行っている。施設で足りないときは講師から借りている。

インターネットで検索してプリントアウトしたモチーフを描いているため、著作権がどうなのか等、権利関係の悩みもある。

所感

(岡崎)

とても恵まれた環境にあり、手厚く万全とも言えるサポート体制がある。近隣よりボランティアで来られているアートの指導者さんたちにとっては、活動が生き甲斐になっているように思われるし、利用者さんも安定して気分良く過ごしているように感じられた。ただ、それぞれの活動は余暇活動や訓練の範疇にあり、陶芸であれ、絵画であれ、特徴づいた活動にはなっていないように感じた。しかし、それは活動の位置づけ(目的)の考え方であり、余暇活動や訓練の一環と捉えれば問題はないように思う。

開所以来10年以上も活動を続けている中で、ほとんどの利用者さんが同じ画材を使っている点については、変化を試してもいいのかもしれない。人によっては、固形の水彩絵の具は使用が難しいと思われる。また、個々の筆圧や身体の動き(ストローク)、趣味趣向に合わせた画材を選ぶことで、肢体訓練や情操訓練としても発展するだろう。使ったことがない画材でも、どんどん使ってみるべきではないかと思われた。

(宮下)

重度の身体障害のある人が多いため職員数が多い。絵画の時間は、その職員たちが絵具の配合や筆の洗浄、描画の補助をするなど、非常に手厚いサポート体制でおこなわれている。絵画(及び陶芸、書などその他の創作活動)の指導者は、地域のボランティアさんたちが担当している。活動の位置づけも創作というよりは余暇活動としている。

大和郡山市千日町25 - 4

話し手：須川映治さん(代表理事、所長)

調査日：2014年10月29日

調査者：阿部、太田、前川

[基本情報]

- ・サービス種別：生活介護(法人は生活介護とグループホーム)
- ・利用定員：20名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別：17～18名、身体障害、知的障害、精神障害(重複あり)
- ・利用者の年齢：20代～70代(40～50代が多い)
- ・職員数：8名(グループホームは3名)
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年)：法人、施設ともに2011年



現状

らんまんは2011年9月に始まる。福祉現場で共にいた仲間や、家族などが集まって運営をすすめてきた当初から、どこにも行き場がなくなった人のセーフティネットの場を提供する役割を担うことが多く、安心できる生活環境の提供を重点に活動をしてきた。まだ3年であるが、地元自治会の軽印刷仕事や、近所の子どもたちへの駄菓子屋活動のおかげか、地域になじんできていると感じている。

事業所での活動に、特に決まった作業はなく、芸術作品への取り組みを含め、メンバー個々の課題を明瞭にして、それぞれのメニューに従い活動を行っている。また不定期に、販促用品のつめ込み等のスポット作業が来た時は、それぞれ役割を決めて、全体で取り組んでいる。

基本的に絵画・陶芸等、個々の思いに従って創作を進めるが、創作の悩みには、悩みを共有することで答えている。そのために職員の側から作品を指導することはない。例えば「不要なものはない」を基底に、競走馬の使用済み馬蹄に絵を描いて作品に仕上げる取り組みをしたところ、そのインパクトで思った以上の評価を受け、創作上のブレークスルーを見出すことができた。また利用者の中には、毎週陶芸教室に通う人もいる。でも習うことではなく講師や教室の仲間との交流が楽しみで、レース生地を活用するなど、独自作品はむしろ深化している。

作品の保管管理も課題で、現状はダンボールやロッカーにしまっている。材料は事業所から提供したり、どうしても欲しいものは個人で購入したりする。狭い販路のためか、売上は実際に工賃として支給するには足りず、法人が作品の買い上げもしているが、作品価格の付け方は、自分たちの評価でいいのかと悩んでいる。

作品は、奈良県障害者芸術祭やその一環のプライベート美術館等で発表しているが、最近は完成度も高く、多様な展覧会でまずは人目に触れさせて、評価を求めていると思っている。また販路の開拓が課題。近くの商店が近々閉店なので、そこをギャラリーに活用できればと考えている。

所感

(太田)

施設は生活介護を軸にした事業を展開。3 障害を対象に職員も福祉職が多い。所長の須川さんが「ここはどこも行き場のなくなった人のためのセーフティネットの場としてある。」と言うように、重度の人も多い。とにかくそのような利用者が「生きる」「安全を生活する」という基本を充足するために、安全でくつろげる場所を提供している。作品は大胆で、あるいは繊細で生き活きとしていた。

須川さんを中心として、職員が温かく見守っている雰囲気は伝わってきたが、彼らの作品を社会に発表していく場の提供など、もどかしさを感じつつもそこまでは手が回らないというような印象を受けた。とりあえずは、工賃をもらって好きなことをする経験を大事にしている。利用者のなかには「金持ちになりたい」「有名になりたい」などの夢を常日頃、職員にも言っているとのこと。その言葉は大事にしたいが、決定的な方法がわからずジレンマを抱えているように思われた。

(前川)

職員が、様々な事情から利用者の遠方にある実家まで訪問したり、美術に関する専門的な知識やノウハウを自分たち自身では持たないものの、その分制作に必要な相談を出来る人を地域の陶芸教室等を回って探したり、利用者が必要とされることや状況にがっかりと合わせて動かされてきた印象を受けた。

職員からお話を聞く前に、作業スペースで制作される2人に作品や制作の様子を見せてもらいながら、作品自体や施設に来られるまでのお話を直接聞くことができた。作品の話聞く際、目の前にある作品自体だけではなく、個人の制作史(制作・鑑賞経験、制作のきっかけ、施設の中での制作歴、自宅での制作の有無や、素材や手法の変遷など)についての一定の情報を得る事が、個々人の制作とその環境について具体的に考えて行く上で重要だと感じた。

合同会社しあわせ工房 ヨロコボ

奈良県奈良市杉ヶ町35-2-101

話し手:久保田麻丈さん(職員)

調査日:2014年12月19日

調査者:宮下、森下

[基本情報]

- ・サービス種別:生活介護(月～金曜日、希望があれば土曜日も)
- ・利用定員:20名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別:10名前後、身体障害・知的障害・精神障害・障害児
- ・利用者の年齢:19才～62才
- ・職員数:6名
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年):法人設立、生活介護2014年5月～



現状

創作活動がメインの生活介護事業所。創作活動は社長の希望で始まった。利用者にとって、自己表現の1つにつながるように、あるいは精神障害のある人もいるので自分の居場所になればいいと思っている。利用者は、創作活動が初めての人たちばかり。活動時間は午前中。1回2時間半ぐらいにしている。

画材を選ぶのは職員であり、画材屋で購入しているが、100円均一の店でも購入。または担当の久保田さんの家にあるものを使用している。使いこなせる自信がないとか使用に迷いがある画材は100円均一の店で購入し、試してみよければ、きちんとしたところで購入している。

久保田さん自身が、自分も絵を描いていたことがあり、事業所でのアート活動にも経験がある。この人のタッチならもっと描いてもいいかもしれないというところからスタートして、一人ひとり独自のタッチに発展していくのが望ましいと考えている。

まだできて間もない事業所なので、本格的に活動していくためには、場所の工夫も必要である。作品がどんどん増えていくので、保管場所も確保したい。

発表は奈良県の障害者作品展や国際障害者交流センタービッグアイの公募展で発表。今後も出す機会は設けていきたい。

今後の希望として、パソコンを使って創作にも挑戦したい。また、他の事業所とつながりを持ち、お互いに刺激しあえたら楽しいと思っている。

所感

(宮下)

できたばかりの小規模事業所で、創作担当の職員が1名、活動に参加しているメンバーは4～5名。アトリエは、ビルのカラージを改装している。しかし、担当職員に他施設での勤務経験があり、自身も創作活動を行っているためアートへの理解は深い。メンバーも皆、これまで自発的に絵を描いてこなかったと言っていたが、目を引く作品がいくつかあり今後の飛躍が予見される。

(森下)

担当のスタッフの方が意欲的で、自宅からもってきた画材や安く購入した画材などを使用しながら、絵を環境を整えている。事業所自体が、少人数で自由な雰囲気であり、創作活動も教えるのではなく、一人ひとりが関心をもっていることなどを自由に描いている。また、施設長などの管理的に立場にある人の理解もあり、画材の工夫など少しのサポートで作品としてももっと興味深いものがでてくるのではないかと感じた。

北口拓巳さん

話し手:北口拓巳さん、北口拓巳さんのお母さん

調査日:2014年12月8日

調査者:阿部、岡崎、前川



現状

もともと、子どもの時にコミュニケーションを取る方法として母親が話しながら描いていた。幼稚園の頃から、旅行の後に自分で思い出を描くようになった。現在は主に自宅の食卓で絵を描いており、絵を描く席と食事をする席が決まっている。制作時間帯は夕食前後。養護学校の高等部に通っており、学校などのある日はあまり描かず、休日などの方がよく描く。学校では、普段家で描くような絵は描かない。絵画教室などに通ったことはない。

画材は、子どもの頃は母親が選んでいたが、現在はスケッチブックのみを母親が選び、ペン(コピック)は自分で選んでいる。使用画材は、クーピー→色鉛筆→色鉛筆+マッキー→コピックという流れで変わってきた。

余白は埋めるように分割しながら塗りつぶすことが多い。白く見える部分も、白っぽい色で塗られている。1枚ずつ集中して描き、1枚にかかる時間は2週間くらい。一定方向から描いているため、天地関係がわからない絵にも天地がある。

奈良県障害者芸術祭は、学校の先生に情報をもらい、出展した。出展する作品は本人が自分で決めている。

玄関やリビングに額装した作品を飾っている。お母さんが額屋さんで額装している。

今後の展開として、公募展などにも出せる作品があれば出してみたいと考えているが、情報が入手しにくい。現状では学校の先生からもらうしかない。

今後の課題は、作品の保管。立体については保管が難しい。置きっぱなし。平面作品は基本的には箱に入れて保管している。作品の制作経緯は、母親が把握しているが日付などの記録の管理は充分でない。

所感

(岡崎)

絵を描くことが、幼いころからの親御さんとの暖かいコミュニケーションの中で育ってきており、周りの理解や応援も自然と成り立っているなど、とても安心できる活動のかたちだと思われた。

好きな画材が決まっていて、作風も完成しつつある。作品は、アートとデザインどちらの視点からも魅力的で、これからより多くの人に作品を見てもらい、ファンが増えることを期待する。

個人的には、大きな作品が生まれることも楽しみに思った。自宅では画用紙以上のサイズは大きく感じるようで、挑戦していない様子だが、今後適切な環境とサポートがあると、自然に大きな作品も生まれる可能性もありそうだ。また立体作品も可能性を感じられるものだったが、これまで自宅では評価と保管が難しかったようなので、サポートを考えていく中で可能性が広がることを楽しみに思う。

本人はまだ若く、いろいろな経験をする中で、作風も変わっていくかもしれない。作品が彼への理解を深める入り口となるためにも、作品に日付を付けておくことを含めて、各作品の生まれたいきさつなどのストーリーを簡単にでもメモしておいてもらえるといいなと思った。

引越しが多いそうで、今後も引越しによって環境が変わる可能性もあるが、発信力を持つ信頼できる人や団体と関係を持っていれば、どこに行っても問題はなく、社会との繋がりを広げていけると思われる。

(前川)

現在高校生という事や、学校よりも家で描くことが多いことなどから、絵や制作することが「家庭というプライベートな空間」で行われる事に注目がいった。小さい頃言葉がなかなか出ない時、医者に言葉がますます出にくくなる可能性があるのではあまり絵を描かない方がいいと言われたそうだが、絵がお母さんとの重要なコミュニケーション手段だったので描き続けた、という話や、小さな頃に出先で見たモチーフを帰宅後しばらくしてから(パンフレットなどを参考にして)描くようになった話、出かけたとき等にお菓子などは欲しがらず、代わりに好きな色の画材を買う話など、「絵を描くこと」との親密な関係が伺える話を多く聞いた。

学校を出た後、絵を描いたり表現がしやすい外での空間は環境次第で変化する可能性がある。しかし、これまでの制作やそのまわりとの関係はとても順当に見え、それをこれまでの生活の中で育めたのはとても良い事だと思う。環境の変化があっても、「絵を描くこと・制作すること」の個人的な空間での位置付けがしっかりしていれば、急にそれが生活の中から無くなるということは少なくなるように思う。

あと、お母さんが、「思春期になってから青色が増えた」ことを少し気にされており、同じ制作者という立場から、これまでも画材や方法に変遷があった様に変化するだろうし、そこまで気にする必要はないと思う、と応えた。今回の調査の最中他の場面でも、見る側の「読み」と、作る側の(無意味なものも含めた)「動機」とのズレ、のようなものについて改めて感じる事があった。

宮本昭寿さん

話し手: 宮本昭寿さん

調査日: 2014年11月20日

調査者: 阿部、宮下



現状

描き始めたきっかけは、精神科病棟に入院しているときに、元気のない人を喜ばせたいと思ったから。いまは自宅で制作している。自分のイメージに近い写真を見て描くこともある。絵を描くのは好き。実際に人を見て描くのが、描きやすいし楽しい。

制作には波があり、一日中、一晩中でもやっているときもあるが、毎日は描けない。基本は絵画だが、立体もやってみたいと思っている。

画材はお金がかかってしまうので、画用紙も絵具も100円均一の店で購入しているが、それでは自分の思うような色が出せないと感じている。創作スペースもちゃんとほしく、専門のそういうスペースがあれば借りたい。また、絵の基本的なところ、構図の立て方などをまったく知らないので、勉強したいと思っている。そうすることで、さらに自分の作品はよくなると感じている。

販売は、現在は行っておらず、基本的にはプレゼントすることが多い。が、100円でも500円でも、買ってくれる人がいたら励みになると感じる。病気のことも知ってもらいたい。障害があってもこれだけ描けるんだというのを見せたい、創作活動を通じて、障害を克服していこうとする姿勢を、世の中に示したいと考えている。

鑑賞者が楽しくなるような世界観をつくりたい。展覧会に出展しても調子が悪くてみにいけないこともあるが、できるだけ発表の場をもちたい。今後、同じような病気をしながら描いてる仲間をつくりたいと考えている。描いていても一人では寂しいので、情報交換や批評などを行えれば、励みにもなる。集まれるサークルや事業所が奈良にあったらとてもうれしいし、通いたい。

所感

(阿部)

制作をはじめたのはうつ病を発病してからで、4、5年前からとのこと。人から教えてもらったことはないとのことだった。100円均一の店で買った12色の色鉛筆で、出したい色が出るまで時間をかけるこだわりがあった。

モデルになる女性は、もともと入院患者や事業所の利用者なので、発表する時に断られたり、確認するのが難しく、雑誌等を見て描くこともあるが、人を見て描きたいので、モデルになってくれる人が欲しいとのこと。展覧会や公募展にも興味があり、絵をおしえてくれる人や、基礎をおしえてくれる機会があれば、参加したいとのこと。また同じような障害のある人同士で情報交換したり、一緒に制作してくれる人(一緒にスケッチに行くとか)、そういうスペースがあれば励みになる。自分の作品を通して自分の障害を知って欲しいとのことだった。個人の活動でまたほとんど情報がないところで、積極的に前向きに制作されていた。こういった、個人で制作されてる人への支援(情報が行くだけでも)が必要だと感じた。

(宮下)

精神障害を患い入院した時に会った、笑わない女の子を喜ばせるために絵を描き始めた。徹底したメルヘンでファンタジックな世界観と、細部描写への粘着質のこだわりが特徴。画題は極めて少女趣味だが、よく見ると女性の身体や衣服の素材感の表現にはエロティシズムがあり、その違和感が奇妙な感覚を生じさせる。今はお金とチャンスがなく独学で描いているが、機会があれば絵を習いに行きたいと言っていた。もしそれが実現し技術や思想が習熟していったならば、宮本さんの今の特徴が消えてしまうのではないかという気もする。美術界で生きていくことの難しさと、アール・ブリュットの枠組みの中でのみ活動することの是非を考えると、どちらが幸せなのか非常に難しい問題だと感じた。

山口みづほさん(ならやま会 いずみ園)

話し手: 吉岡葉子さん(いずみ園職員)、山口まゆみさん(山口みづほさんのお母さん)

※山口さんの制作風景を見せてもらいながら、同時にマンツーマンでサポートする吉岡さんに話を伺う。午後からはギャラリーになっているご自宅で作品を見せてもらう。

調査日: 2014年12月24日

調査者: 阿部、太田(太田は一部のみ)、前川

[ならやま会いずみ園 基本情報]

- ・サービス種別: 入所、生活介護等
- ・利用定員: 入所・生活介護 / 45名
- ・利用者数と主な利用者の障害種別: 55名、知的障害、身体障害
- ・利用者の年齢: 19~60歳
- ・職員数: 常勤職員23名、非常勤職員16名
- ・施設の沿革(法人設立年、施設開所年): 施設開所2007年



現状

いずみ園には、ステップ班、手織り班、自然班、農耕班、あゆみ班がある。山口さんはステップ班に所属して8年目。担当の吉岡さんがサポートしており、吉岡さん不在の時は他の職員が介助する。その時は、クラシック音楽をかけることもある。

吉岡さんがヘルパーとして山口さんの介助をした時に、ショッピングモールのギャラリーに本人が入って行き自分の気に入った絵の前で何度も止まって観たので、絵が好きなのではと思った。シロフォンの演奏をするときにマレット(バチ)を持って演奏するので、筆も持てるのではと渡してみたら楽しそうに描き出した。画材はすべて母親が用意する。筆は、持ち手に伸縮性のテーピング、包帯をまいて握りやすいように中央を太くしている。鉛筆だと細すぎるようで、筆を好む。

制作の際は、吉岡さんが筆に絵具をつけて渡す。吉岡さんとしては、色の選択などについてもこれでいいのかという葛藤が常にある。色について、画集や作品集をみながら、「こんな色いいよね」など提案することもあるが、常にYesのサインを読み取ってすすめる。本人は嫌な場合は筆を投げる。また、吉岡さんは、山口さんのやる気を引き出すために、手をたたいたり、「見えてるー?」「いいねー」など常に声掛けをしたりしている。絵を描くのは、5分ぐらいのときもあるし、20分、30分ぐらいのときもある。「頑張ろうよ」と言っても、筆を握らないときもある。1つの作品を仕上げるのにかかる時間は、2~3週間ほど。最初のころは、完成なのかわからなくて、続けていたが、画面がどんどん真っ黒になっていった。「完成」についても、葛藤がある。これで完成なのかわかっているが、本当にyesなのかわからない。発表の機会は、障害者作品展など。両親が主催し、個展をアートスペース上三条で開いたこともある。作品は家に持ち帰り、保管している。

自宅の一部をギャラリー「光の庭」として改装。ギャラリースペースは、古墳のある裏庭と、隣の小さなリビングのようなスペースとの繋りを意識して作られており、狭い印象は受けない。山口さんの作品が10点前後常時飾られており、知人に山口さんの異なる一面を知ってもらえる場所として作ったそう。収納スペースには作品ごとにダンボール箱にきっちり入れられ、びっしりと納まっている。

所感

(阿部)

ご両親は、道具、画材、資金、技術、展覧会開催の支援などを裏方に徹し、制作自体はいずみ園の職員さんとおこなう。両親はもともと絵や制作については知識がなかったが、とても熱心に勉強し、専門家(お隣の芸術家夫妻)に聞いたり、みづほさんにあった道具を開発をしていた。ご両親のみづほさんに対する熱心な思いに驚いた。人づきあいを大事にしているので、周りの人にもとても恵まれていた。

制作を始めて、4年程で、作品数は30点程あり、額装や記録、保管も完ぺきだった。個展は1度開催したが、もう一回したいという夢があるとのこと。外部出展は、個展を除いてまだ県の障害者作品展と、プライベート美術館(2012年度)のみ。いろいろな障害者作品展の公募展の情報はご存じなく、今後情報が欲しいとのことだった。将来の生活支援のこともしっかりと考えておられる様子で、活動は「みづほの生きた証」という言葉が印象的だった。

(太田)

言語による意思表示がなかなかわかりづらく、身体的にもサポートが必要な障害者の芸術活動に対して、職員の葛藤がうかがえた。関係性をつくるのがまずは求められるが、YES、あるいはNOの意思表示のサインを汲み取ること、やる気が全くなさそうなときは無理強いしないが、ちょっと手をたたいて常に声掛けをし、次の行動に移るためのやる気をもたせているときもあった。パターンリズムをできるだけ排除しようとしているが、常にそこには葛藤も伴っているようだった。

(前川)

モチーフや色、完成などの選択、タイトルなど、決定の要素がある部分を、サポートする吉岡さんが山口さんに尋ね、様子・反応を見ながら判断し、制作を進めている。その選択や決定が妥当なものなのかは短時間の見学では判断し難く、吉岡さん自身その都度の判断が正しいのか、いつも疑問をもちながら進めているそう。またその中から出てきた「悩んでいるだけでは進まない」といった言葉も、改めて、「協働」について考えることになった。支援者との新しい関係の中に身を置く、そこで起る事に注意を払うことの重要性を感じた。

山崎康史さん

話し手:山崎康史さん、藤井基秀さん(山崎康史さんのお父さん)、藤井光佐子さん(山崎康史さんのお母さん)

調査日:2015年1月10日

調査者:藤井



現状

小学校6年生のときに場面緘黙症の教育相談を訪れ、その当時の相談員に、「思うことを自由に描いてみたら」とすすめられた。必ず一日一枚スケッチし、一ヵ月ごとの教育相談のときに観てもらおうようになる。その後、絵の講師と出会い、継続して創作するようになった。

一年に5点ほどの作品が生まれる(サイズは10号くらい)。ほぼ毎日のように制作している。本人以外はアトリエに入ったことはなく、本人のペースを家族も尊重している。家族で外出した際に自ら写真撮影をしたもの、自宅の庭や近所の風景などがモチーフとなっている。家族も気づかない視点が作品に現れている。インターネットを使い、自ら必要な画材や額・マットなどの資材を発注している。1998年から公募展などに出品し、2010年にはたんぼの家アートセンターHANAギャラリーで初めての個展を開催。作品展示、DM制作、広報、図録・ポストカード製作などHANAのサポートを受けながら行った。

公募展にも、出品している。小作品でも選考してもらいやすい公募展を父親が探し、応募している(大作となるととても創作時間を要するため)。父親としては、公募展を通じ、より多くの人に作品を観てもらい次の発表機会につなげたいと考えている。また、母親は、個展を開催し、より美術関係者に作品を観てもらいたいと考えている。

作品は、すべて額に入れて、自宅で保管している。毎年12月に、その年に制作した作品をまとめて、家族に初めて披露し、自ら居間で作品撮影している。それまで、家族もどのような作品が創作されているかわからない。父親がその写真データを使い、作品のポートフォリオを製作している。

所感

(藤井)

できるだけ作品を見てもらいたいとの考えから、大切な作品は保管しながらも、原画販売やリトグラフ製作などを含めてマネジメントしてもらえるところを探しており、父が画廊などをまわりたいと考えている。

また、奈良県桜井市にある美術館と企画展で作品の発表ができないか相談をおこなった。しかし、未発表作品に限られること、搬入出や展示作業の手配を自力で行わないといけない点などから、開催には至っていない。家族にも出展のためのノウハウがないので、展示や広報などサポートを必要としている。

Aさん

話し手: Aさん、Aさんのお父さん

調査日: 2014年12月20日

調査者: 藤井、森下



現状

創作のきっかけは生命保険のコンテストに応募し県知事賞をもらったことが嬉しかったため。13歳から地域の美術教室やYMCAなどで油絵を学ぶ。中学から美術教師に油絵を習うようになり、現在も親交がある。また、民間のアトリエにも通っていた。現在は、親族の所有するマンションの1室で創作している。ふだんは働いているため、週末にのみ創作したり、美術館に行ったりしている。

描くことが好きで、手法は油絵。その時の気分でテーマが変わるが、現在はフルーツを描くことに凝っている。基本的には描きたいものを描く。時にはフルーツは図鑑などを見て描いたりすることもある。京都や大阪の展覧会にもよく行く。

画材などは画材屋で自ら購入している。

作品の発表は数年に一度ギャラリーをかりて行っている。ギャラリーのオーナーとも親しく、常連とも顔なじみになっている。また公募展にも出展している。

作品の保管は父親の職場の一画や創作場所のマンションで行い、おそらく作品総数は200点を越えている。基本的には作品は販売していないが、知人に請われて数点、販売したことがある。

作品の記録としては、簡易的に自分で行い、スクラップして資料を作成している。個展開催のときのダイレクトメールや記念用のポストカード制作にあたっては、プロのカメラマンに依頼している。

描くことが楽しく、また展覧会の来場者と語り合うのが楽しい。現在は仕事が大変なため、サークルなどに入るより、週末を利用し自分のペースでやっていくのがあっているように思う。高校に行っていた時は、友達と批評をしながらも楽しかった。

所感

(藤井)

創作活動に関するニーズとして、以下があげられる。作品を見合って話しあえる沙龙的な機会があれば行ってみたい。語り合うのが楽しい。油絵が好きで創作してるが、日本画にも取り組んでみたい。親としては、サークル的な集団のなかで刺激され、創作できるようになってほしい。との意向もあり、地域のなかでそのような沙龙のような場が求められている。

(森下)

ウィークデーは朝早くから仕事にいき、土日をつかって絵を描いたり、画材を購入したりなどの外出にあてている。創作活動は自宅とは別にあるマンションの一室で行われ、数年に一度個展を開催するなど、創作する環境としてとても恵まれており、自立して活動を継続している。ご自身のペースがあるので、今の環境のままでも十分だと思われる一方で、沙龙のように絵が好きな方がお互いの絵について見ることができたり、さまざまな情報を交換しあえるような場があれば、とてもいいのではないかとも思われた。Aさんに限らず、発達障害のある方などでふだんは仕事をし、休みの日や夜などをつかってご自宅で創作活動を続けておられる人は多く、そういった人たちが交流できるような場が求められているような気がした。

2) 市民の関心に対する調査

1. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるボランティアのアンケート調査

奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2014-2015(会期:2015年1月31日(土)～2月8日(日) 会場:奈良県文化会館、東大寺、奈良町界限ほか)にボランティアとして参加した人たちに、ボランティアをした感想や障害者アートへの印象の変化などを調査するため、アンケート調査を行った。

1) 調査の概要

調査期間

2015年1月31日～2月15日

調査対象者

奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2014-2015にボランティアとして参加した60名。

返却率

17名回答／60名(有効回答率23.8%)

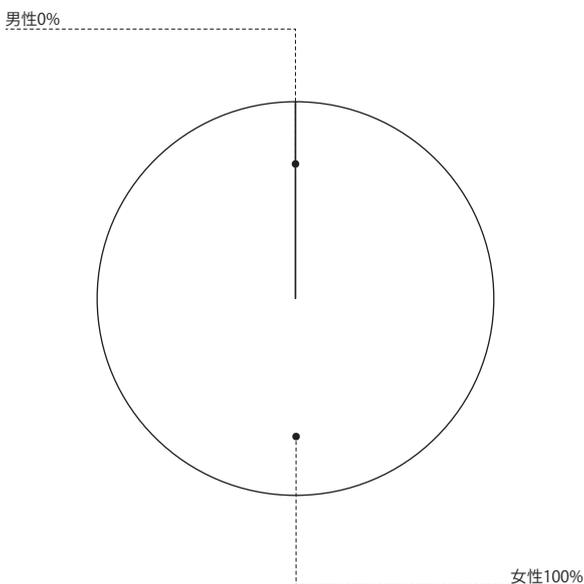
質問内容

質問内容については、以下の回答中のものを参考

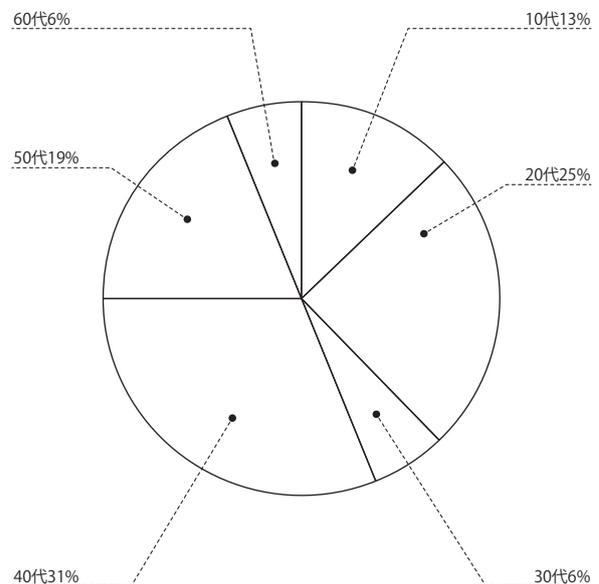
2) 結果

1. アンケート回答者の基本属性

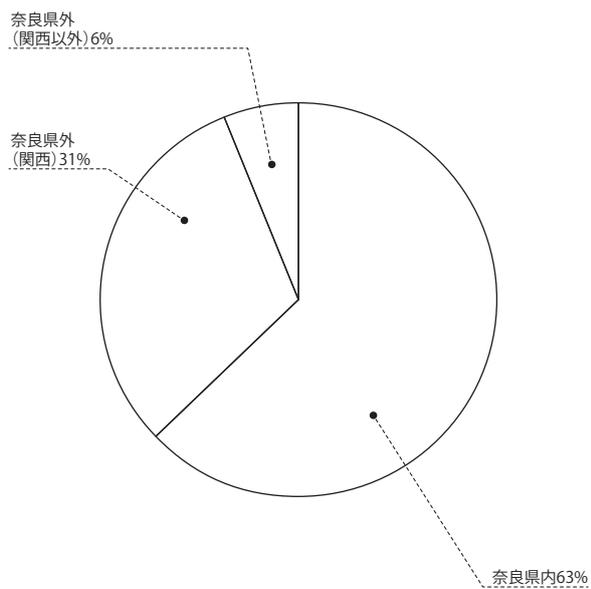
性別



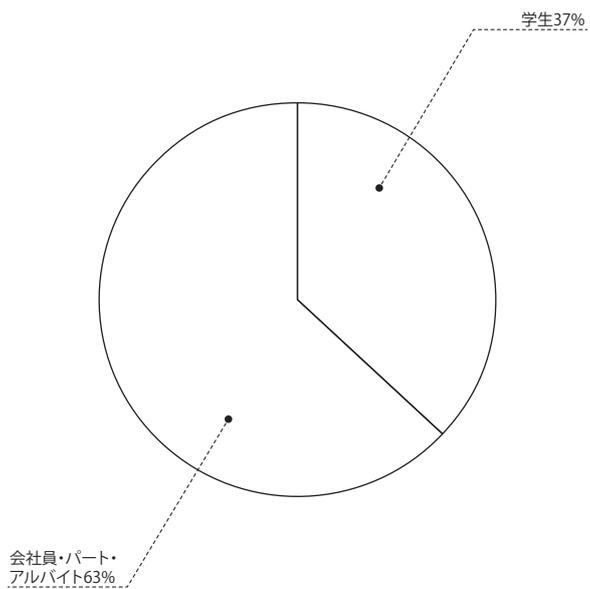
年齢



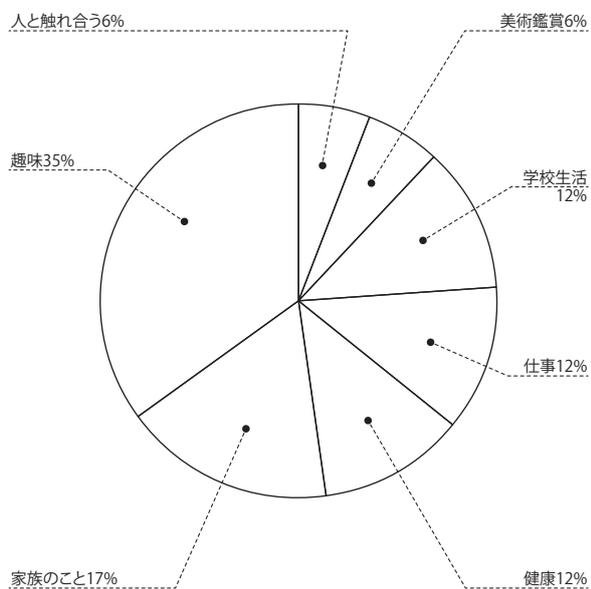
居住地



職種

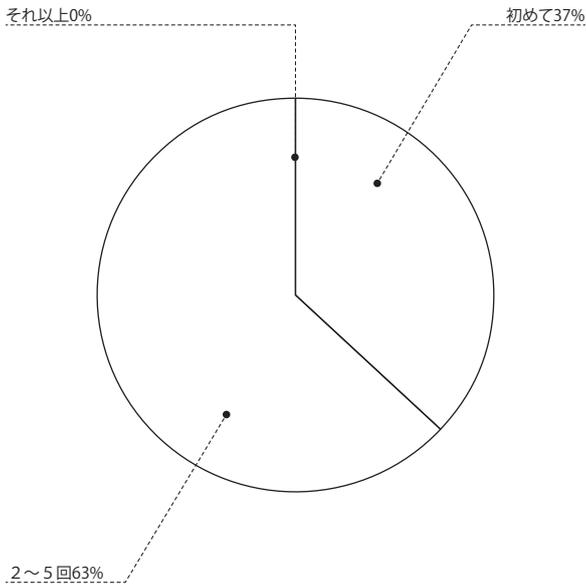


日々の関心ごと

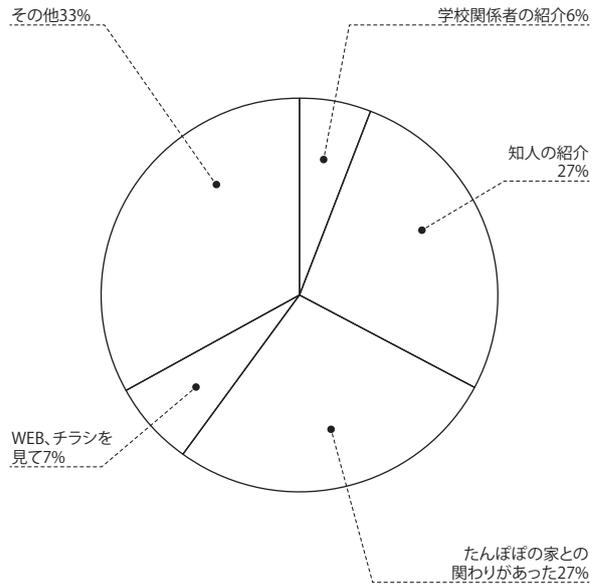


2. 奈良県障害者芸術祭のボランティアについて

参加回数



参加したきっかけ



○参加理由(自由記述) (数字は2件以上同様の回答のあった数)

- ・ 去年も参加させていただいて、その時とても楽しくて今回も参加させていただきました。 2
- ・ 美術やクリエイティブな活動に以前から関心を抱いており、自分もその活動にお手伝いできたらと思いました。 2
- ・ 学校での取り組みでボランティアをするというのがあって、インターネットで検索してみたところ、面白そうだったから。 2
- ・ 会社からの勧めもありましたが、普段ほとんど関わりのない障害者の方がどのような作品を作られているか見てみたいと思いました。 2
- ・ 知人の紹介で参加しました。何も知識がなく、事前説明会で配られた冊子を見て楽しそうだという印象を受けました。
- ・ 何か障害をもつ方のお手伝いがしたいと思いながら、なかなかそのきっかけがなかった。少しでもお手伝いが出来れば、と思い参加しました。
- ・ 私の子供も障害をもって生まれてきたので、このような催し物があれば参加して、障害者の方にもっと頑張ってもらえればと思います。

○お客さんの反応で印象に残ったものはありましたか(自由記述)

・お客さんが楽しんでいる様子

- 触れる写真を一緒に体験して、お客さんがでこぼこを感じてくれて、わあーって楽しんでもらったこと。
- アイマスクを着て、スカートとジャケットを着用した方(男性)がにこっと笑って、とてもうれしそうにしていたのが印象的でした。
- 観に来ていたお客さん皆さんがとても絵に関心をもたれていて、すごく印象に残りました。
- 「ピカソと肩を並べられるよ」というお客さんの言葉。
- 切り絵に感心されている男性の方が印象的でした。
- 鉛筆の削りかすを見て、「日々の生活で捨ててしまうものだけど、見方を変え、ふと気づくと色や形がキレイだと思うときがあります」と言われたとき。

・お客さんとのコミュニケーションについて

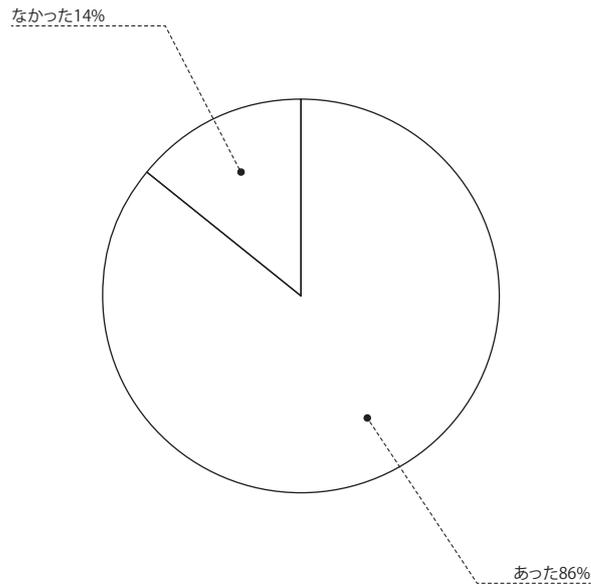
- 外国のお客様とコミュニケーションがとれて嬉しかったです。
- 作品の説明を求められた際、あやふやな答えしか返せず、お客様も納得されていない様子だった。

○障害のある作家やその関係者が見に来られましたか？

その時に印象に残ったことはありますか(自由記述)

- 出展者の中村あいさん(切り絵作家)が来られていました。作っているハサミは普通のハサミだがとつてもてになじんでいるとおっしゃっていたのが印象的でした。
- 目が全く見えなかったり、見づらかったりする人がいたけれど、皆さんすごくしっかりしていたし、よくしゃべってくれて本当に楽しかった。
- 視覚障害の人が来られていて、普段あまりそのような方たちと接することがないですが、今回そのような機会に接する事ができて良かったと思いました。どういう絵が描かれているか、わかりやすく伝えるのが難しかったですけど、楽しかったです。
- ある作家さんを昔学校で教えておられた方が来ており「たまたま展覧会を見に来たら偶然、その子の作品があってびっくりした!」と大変喜ばれていました。

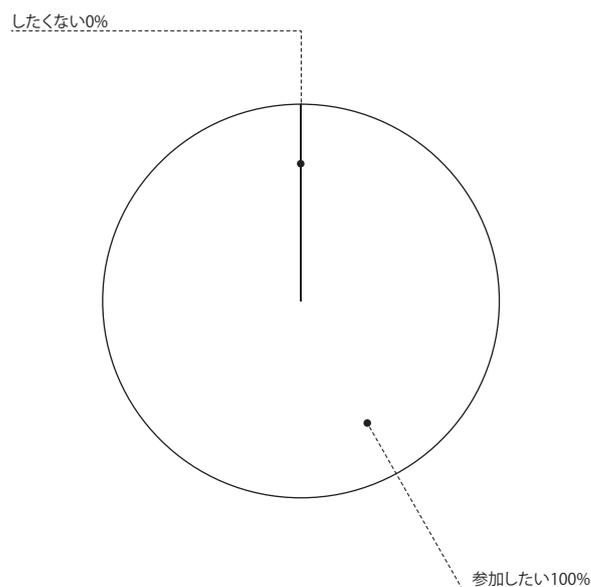
障害者アートへの印象の変化



○「あった」と回答した人の理由

- 作品を通してその人となりを感じるといふか、イメージが膨らみました。また、自分にはない感性の豊かさに感動した。
- 障害者が描かれている絵だったらもっと独特な感じなのかなと思ってましたが、すごく上手でキレイでした。私の中では印象ががらっと変わりました。
- 線がふるえていたり、曲がったりした感じなのかなと思っていたけど、本当にキレイだし、パンダなどの切り絵の繊細さはすごくびっくりした。
- 繊細な仕事をされている方を知って驚いた。

また参加したいですか



○ボランティアに参加した感想(自由記述)

- あまりボランティアに参加することがないですが、自分の時間をボランティアに使えることが今後、少しずつでもできればいいなと思いました。

- ・今回、視覚障害のある人と一緒に絵の鑑賞をしてみて、私にとってとても良い経験になりました。その方にいかにわかりやすくイメージさせてあげるか伝えるのが難しくて、私が思った、感じたままのことを言って、わかりづらくさせてないか少し不安でした。でも、とても楽しかったです。今まで美術館などに行ってもあまり長く、深く鑑賞してなかったんですけど、この機会に「こういう鑑賞の仕方もあるんだ」と知れて良かったです。良い機会になりました。今回は参加させていただき、ありがとうございます。
- ・最初は今まであまり障害者の方と触れ合ったことがなかったので、自分はちゃんとお客さんを安全に誘導して、絵を口で伝える事ができるのかなと不安だったけれど、話していると絵についても難しかったけれど、これは何だろう?これってあれかな?と会話をして自分の知った情報を伝えて、お客さんが、えー、とかなるほど、と言ってくれるのがうれしかったし、普通の世間話もして楽しかったです。伝えることのむずかしさを学べたし、お客さんが分かりやすかったよ、と言ってもらえてうれしかったです。
- ・最初はお客さんに声をかけるのが緊張しましたが、いらっしゃった方々はみな、障害者や障害者アートについて理解、関心があり、話しやすかったです。職員の方々も分からないところがあったから丁寧に教えてくださったので、気持ちよくお手伝いさせていただきました。
- ・初めての参加でした。やさしさと感動をいただき、ありがとうございました。
- ・昨年と今年で2度、参加させていただきましたが、どちらもとても楽しかったです。お客様に作品の解説をするのははじめは少し緊張しましたが、お客様の方からも気さくに話しかけてくださり、緊張がとけていきました。また来年度も参加させていただければ嬉しいです。ありがとうございました。
- ・ボランティア同士で分からないことを相談したり、聞いてみたり、互いの背景を話したり、作品について話すことが楽しかった。
- ・HAPPY SPOT TOUR!でみた作品は、みる人が愛着を持つことができるような作品が多いと感じ、プロダクト化して様々な人が手に取り共有するもとしての可能性や、エイブルアートの作品の魅せ方の可能性も感じるものでありました。作品の販売という点で、今回私は基本ショップでお手伝いさせていただいたのですが、作り手の顔が商品一つ一つから見えてきて、愛情を持って商品と接することができました。今回のボランティアで面白い発見や今までに無かったような考えが湧いてきて、参加して良かったと思っています。また幅広い年齢の方とお話し出来る機会となったので良い刺激を受けました。

2. 奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARAにおけるプライベート美術館参加団体へのアンケート調査

奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2014-2015(会期:2015年1月31日(土)～2月8日(日)、会場:奈良県文化会館、東大寺、奈良町界隈ほか)のコミュニティプロジェクト、プライベート美術館(会期:2015年1月20日(火)～2月8日(日)、会場:奈良町界隈、近鉄奈良駅周辺商店街の店舗ほか)として参加した店舗を対象に、障害者アートをお店に飾ることへの意識やお客さんからの反応などについて調査するため、アンケート調査を行った。

コミュニティプロジェクト、プライベート美術館とは、公募により集まった奈良県内の障害のある人の作品約140点を、まちのなかで楽しむアートプロジェクトである。奈良でのプライベート美術館の開催は、今年で4回目である。

プライベート美術館とは、参加店舗と、公募で集まった230点ほどの作品をお見合い展示(日時:2014年10月23日(水)、24日(木)、場所:奈良市ならまちセンター1階市民ギャラリー)にてマッチングできた作品を、1月20日(火)～2月8日(日)の期間中、店舗に飾ってもらうイベントである。

1) 調査の概要

調査期間

2015年1月20日～2015年2月15日

調査対象

奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2014-2015のコミュニティプロジェクト、プライベート美術館として参加した店舗44店

返却率

27店返却／44店(うち白票2、有効回答率61.4%)

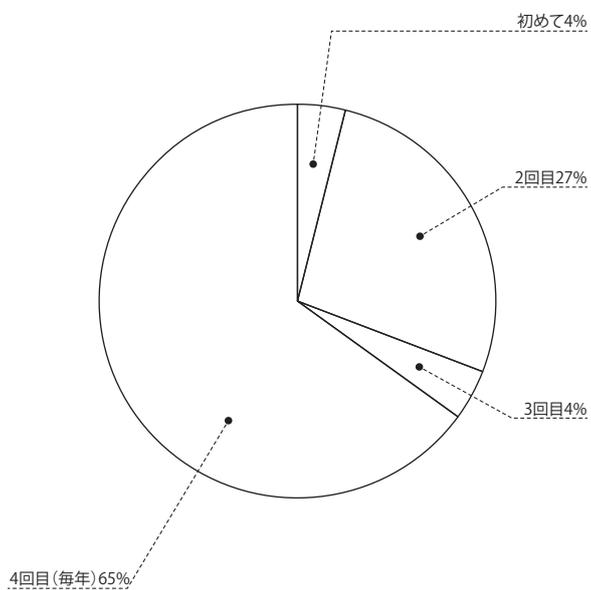
質問内容

質問内容については、質問紙を参考。質問紙は以下のものを使用した

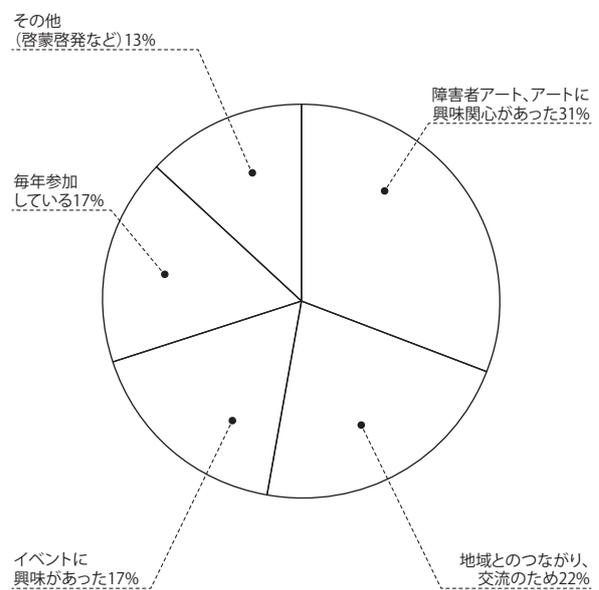
2) 結果

1. プライベート美術館への参加について

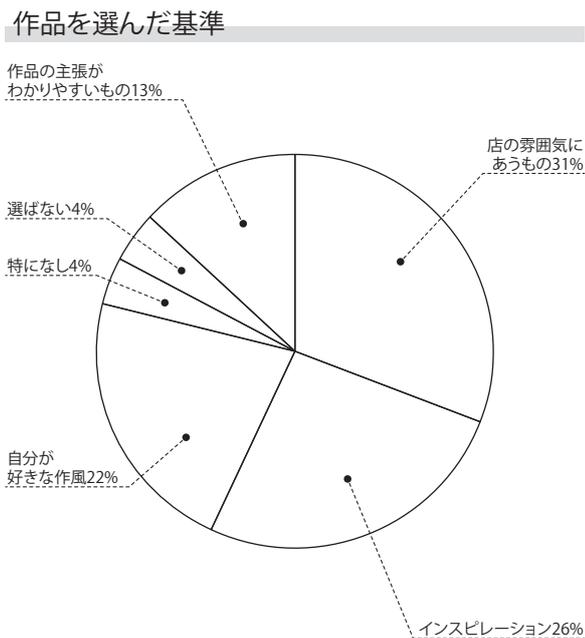
何回目の参加ですか



参加理由



2. お見合い展示会について



3. 展示期間中について (数字は2件以上同様の回答のあった数)

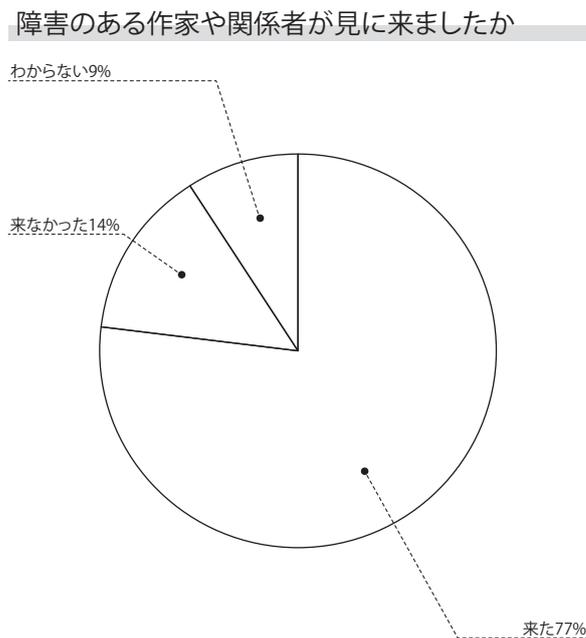
① 実際にお店に展示してみて、作品の印象やお店の雰囲気など何か感じることはありましたか。

- ・ 明るく、楽しい空間・雰囲気になりました。12
- ・ インパクトがあって、作品からふだん店の内にはないパワーをかんじました。5
- ・ いつものお店がひきまるとな気がします。毎年の楽しみです。2
- ・ 特に、大きな絵のほうは目を引きまますし、「何のイベントかな?」と、知らない方にもアピールできていました。2
- ・ 特になし。

② お客さんの反応で、印象に残ったことはありましたか。

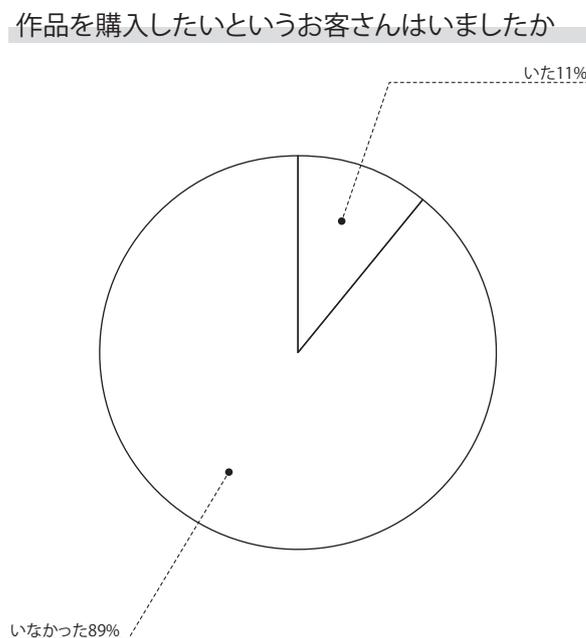
- ・ 「いい絵ですね」とほめておられました。毎年楽しみに来られる常連様もいらっしゃいます。3
- ・ ああ、もう一年たったんですねえ、と言われて、お客さんも去年のことを覚えているのだなあと思いました。
- ・ 絵があることで店にゆっくり滞在して頂いた。
- ・ お茶をのみながら、絵をゆっくりじっくり観る時間っていいネ!という言葉。
- ・ 取り組みのことを話し、会話が膨らんだ。
- ・ 毎年恒例のという感じでご覧になっていかれます。のびのびとしたいいい絵ですね、とおっしゃっていた方など。
- ・ 「けっこう遠かった!」って。で、「来てよかった」って言ってもらえたとき。
- ・ マップ(パンフレット)を見て入ってこられたお客さんは、ほとんど居なかったです。

③障害のある作家やその関係者が見に来られましたか？
その時に印象に残ったことはありますか。



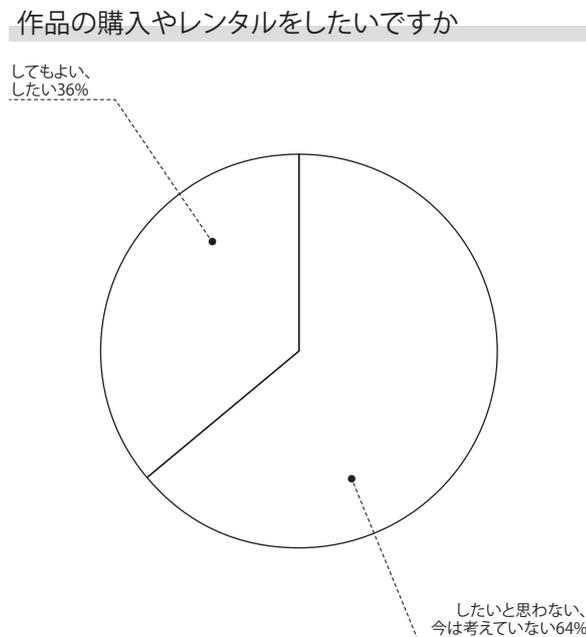
- ・以前の展示でご本人や施設の方が来られました。展示してもらえるとやりがいがあると言われていたのが印象に残りました。
- ・ご自分の作品を見て、照れくさそうになかなか傍に寄られなかったとき。
- ・作品の展示を見て全身で喜んでおられるのが印象的でした。
- ・たくさん来ていただきました。「こんな素敵なお店に置いてもらえてうれしいです」とおっしゃっていただいたことが、私もとても嬉しかったです。
- ・沢山きてくださいました。みなさんと交流ができて、とても楽しいひとときでした。「選んでくださってありがとうございます!」という言葉が心にのこりました。

④お客さんで作品を購入したいというかたはいましたか？



- ・おられませんでした、価格が記入してあれば言われたかもしれません。
- ・買うことができる、という考えがなく、作品を見られていたと思います。買うことを思いもしない、というか。売買があるなら、一言表示がないと難しいと思います。

⑤お店として、作品の購入やレンタルをしたいと思いませんか？
その場合、どのくらいの価格を希望しますか？



- ・今は考えていません。
- ・購入まではなかなか思いません。アートを買うこと自体がなかなか手がでないなあと…。常時は置ける場所がないので。
- ・もし買うとしたら… 2万円ぐらいまでなら考えるかも。
- ・手元においておきたいと感じる作品に出合ったら購入は考えると思います。大きさにもよりますが5千円前後。
- ・1ヵ月、1,000円～ならレンタルしたい
- ・買いたい作品に出会ったらこちらの余裕のある価格で買います。

4. 全体を通した感想

- ・大変楽しい企画です。これからも参加させていただきます。
- ・長く継続することで初めて見えてくるつながりや派生効果がありますので、ずっと丁寧に開催されていくことを望みます。改善や問題点は様々あるのかもしれませんがコンセプトがぶれることがないように、尚一層のすてきな輪ができますことを願っています。
- ・期間中、毎日絵をみることができ、明るい気持ちで過ごすことができました。作家さんが実際に来てくださり、お話することができて嬉しく感じました。絵に対する気持ちをお伺いすることができたので、プライベート美術館のために来てくださったお客様にそれを伝えることができました。毎年、たくさんの作家さんが作品をだしてくださるので新鮮な気持ちで見させていただいています。また来年のプライベート美術館を楽しみにしています。
- ・日々の生活では障害のある方々のこと、その周辺のことを意識することがあまりないのでいい刺激になりま

す。今回も素敵な作品をありがとうございました。

- ・毎年参加させていただいて、ありがとうございます。続けることが大事だと思いますので、来年以降も、よろしく願いいたします。

3. 作品購入者へのインタビュー調査

主にたんぼぼの家に所属する障害のあるアーティストの作品を多数購入した企業(2社)と個人(1名)を対象に、作品購入動機や目的、購入にあたっての課題などについて調査する。

1) 調査の概要

調査期間

2015年2月～3月

調査実施先

(企業)

近畿セキスイハイム工業(セキスイハイム奈良工場 奈良県奈良市西九条町4丁目3-1)

調査日 2015年2月13日

調査者 藤井、阿部

株式会社リブドゥコーポレーション(大阪府中央区瓦町1-6-10 JPビル5F)

調査日 2015年3月10日

調査者 藤井

(個人)

川上文雄さん(奈良教育大教員)

調査日 2015年2月15日

調査者 阿部

調査方法

担当の方および本人に1時間程度のインタビューを実施した。

調査体制

藤井、阿部(たんぼぼの家の職員)で実施した。

2) 結果および結果から見えてきた課題

インタビュー先ごとにデータを作成し、以下のカテゴリーでまとめ直した。

1. 作品を購入した動機、目的、作品選定の基準

- ・飾ってみて明るくなるものを何人かの職員で決めた。特に反対はなかった。
- ・大学の授業では、学生が自分の見方、感じ方、他の人に伝えるための教材として作品を使い、個人の楽し

みとしては、家に飾れるものを選ぶ。絵は安くて飾ることで楽しくて、豊かな気持ちになれる。

2. 購入に関して

- ・正直、相場を知らないなので、適正かどうかはわからないけど、いい価格、ちょっと高いな、と感じることはありました。
- ・購入する作品はだいたい5万円前後のものが多い。一番高いもので10万円。勝負するときは、少し上乗せした額を提示する。義理で購入することはない。好きなものだから、満足している。

3. 周囲の反応や感想

- ・飾ってみて明るくなった。
- ・学生に以前は支援の気持ちがあったけれど、だんだん薄れてきた。

4. 結果から見えてくる課題

企業は社会貢献の一環として購入することが多く、多少価格が高いと一社員が感じたとしても購入自体に影響は少ない。きっかけがどうであれ、障害者アートに触れるきっかけがそこで生まれることはよい広まり方の1つといえるのではないだろうか。結果として、社員個人個人は「明るくなった」などの感想をもつようになっていた。

大学の授業で障害者の絵を教材として使うことで、学生が障害者アートにふれ、誰の評価にも左右されず自然な感想を述べられるようになっており、学生に高い教育的効果をもたらしていると考えられる。ただ、そのためには、教員が障害者アートに慣れ親しみ、理解と知識をもっていることが最低限、必要とされてしまうのではないだろうか。

近畿セキスイハイム工業株式会社

話し手: 草薙雅明さん(管理部部長)

場所 近畿セキスイハイム工業株式会社 奈良県奈良市西九条町4丁目3-1

調査日 2015年2月13日

調査者 阿部、藤井



現状

障害者アートを知ったいきさつは、地域密着活動として、障害のある人が働いている施設とのつながりがもてないかと考えていたところ、たんぽぽの家を紹介してもらい、絵を扱っていると知った。

購入したのは、たんぽぽの家の作家3人の作品。目的は、社内の雰囲気をも明るくするため。作品の選定は、たんぽぽの家である程度セレクトしてもらってきてもらったものを、何人かの職員で選んだ。特に他のアーティストにしようということもなく、社内での反対もなかったため、そのまま購入することになった。

価格については、他の作品の価格を知らないため、適正かどうかはわからない。ただ、少し高いのではないかと感じた。

他にも作品を見てもらう機会をつくる方法として、

- ・住宅展示場のインテリアとして作品紹介とともに飾る
 - ・工場見学会時には近畿一円からお客様に来てもらうので、作品の販売会をする
- というようなことが考えられる。

所感

(阿部)

CSRやメセナの部署はなかったが、労働組合がしっかりしており社員全員(280名)が加入されているということで、社員の社会貢献の意識が高いとのことだった。窓口になっている人が、「社会貢献をするのに、社員が集まって何かをするのは難しいけれど、ほとんどの社員が利用する食堂に、施設の人に来てもらって販売をしてもらったらいいのでは」、と思いついたそう。お互いが無理のないように細く長い支援を考えているとのことだった。ちょうど工場の一部が新しくなったので、会議室に飾る障害のある人の作品を購入。今後購入することは考えておられないが、逆に施設でも展覧会事業や商品化の取り組みを説明すると、それなら2日で1000人規模の工場見学会をしているので、そこで作品や取り組みを紹介するブースを作っては?と提案いただいた。

企業の方は、福祉施設ができることがわからないので、施設側からもいろいろな提案をすると、何かしら機会をいただいたり、情報をもったり、一緒にアイデアを出すようなパートナーシップを組める可能性があることがわかった。

株式会社リブドゥコーポレーション

場所(本社):大阪市中央区瓦町1-6-10 JPビル5F

調査日:2015年3月10日

調査者:藤井



現状

以前より付き合いのあった福井恵子氏 (FLAG DESIGN EA主宰) から、「エイブル・アート」について聞いていたので、とても興味を持っていた。今回、愛媛新居浜工場を新設するにあたり、真っ白いエントランス壁面を彩る作品を探していたときにふと思い出し、改めて「たんぼぼの家」へ訪問した。いのちの現場に届ける製品をつくる工場を彩る作品として、当社の企業姿勢と、エイブル・アートの持つ「今を生きる人の力」を訴えかけてくれる、その生き生きとしたメッセージ性がマッチすると感じ、制作を依頼した。作品を多数見た中で、山野将志さんの作品にインパクトと力強さという点で感銘を受けた。

価格についてはもとより、あつてないようなものだと感じている。障害を持つ人のアート活動を支援したいという想いと、「生きる力を応援する」という当社の想いに合致していると考えており、とても満足している。

エントランスの壁一面を飾る壁画「いのちの森」は、その大きさ(3,800×1,500mm)も含め、インパクトは大きい。来られるお客様からは「迫力がある」また「独特な色づかいですね」という声を多くもらっている。作品の趣旨を説明すると、「素晴らしい取り組みですね」「エイブル・アートに興味を持ちました」と反響は大きいと感じている。また、食堂に飾っている古谷秀男さんの絵画4点のうち、テントウムシとキリギリスの絵は、みんなで仲良く集まって演奏を聴いている様子が、和気あいあいとした感じで、社員の中でも非常に人気の高い作品の1つとなっている。

工場の竣工式に間に合うよう、制作期間がない中で作家にも職員にもうまく対応してもらえて、満足している。

所感

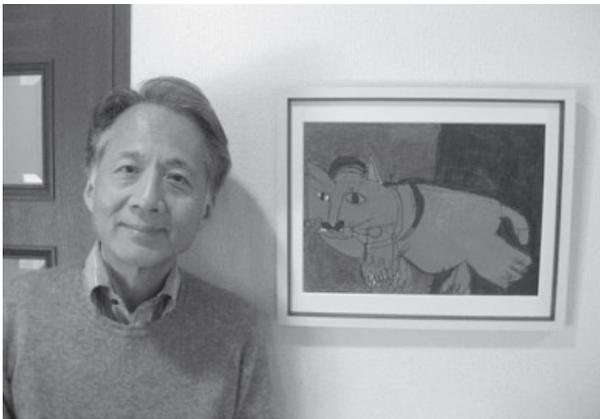
(藤井)

障害のある人のアートが社員へのホスピタリティや社外の方へのコミュニケーションをもたらすきっかけとしてとらえられていることは、鑑賞の対象としての作品の多様な価値を強く示しているのではないかと感じた。アート作品の背景にある一人ひとりの個性や生き方を伝えることは、生産性の効率化だけではない価値をあらわしているように思える。“いのちの現場にとどける”という共通点があがったように、福祉と企業の文化の垣根を超えて理念や姿勢をお互いに見つけて高め合うことで、美術館やギャラリー以外にアート作品が向う選択肢や価値観のとらえ方が広がるように感じた。

川上文雄さん(奈良教育大教員)

調査日:2015年2月15日

調査者:阿部



現状

これまでに購入したのは、絵画30点と立体(陶板やクラフトなど小さいもの含む)10点。合計40点を、自宅と大学の研究室で保管している。

購入目的は、①大学の授業での使用、②展覧会を企画、③自宅で楽しむの3つ。①については、学生に見方・感じ方を論文で表現する力や他の人に伝える力を育てることが目的。②については、実際に大学の教育資料館などで3回、ギャラリー(アールスペース上三条)で5回開催した。③については、楽しむため。購入時の基準は家に飾れるものとして選ぶ。家には必ず数点は飾っており、展示替えも行っている。

障害者アートの魅力は、有名なアート作品よりは安くて、気軽に買えて楽しい。また作品を購入することで、豊かな気持ちになれる。高額な作品や著名な作品を購入しなくても、充分楽しめる点。

これまで障害者アート以外の美術のコレクション経験はない。ただし、器やぐいのみコレクションをしている。高価なものでは、8~15万円する。

購入する作品は、だいたい5万円前後のものが多い(以前は3万円ぐらいだったが、相場が上がったのか、以前より高めのものを買っているせいかは不明)。現在購入したもので一番高い作品は10万円のもの。自分がぜひ手に入れたい作品を購入する時は少し上乗せした金額を提示して、双方が納得した金額で購入している。

購入する場所は、たんぼぼの家アートセンターHANAギャラリーや、東京のA/Aギャラリー。近場で行けるところは実際に訪れるが、施設まで訪問して購入することはない。展覧会の情報はたんぼぼの家から得ることがほとんど。

最初は支援の気持ちが少しあったが、今はほとんどなく、結果として支援の形になっている。同じ人のものを買入することも多い。その場合は2点以上持っている。同じ人の作品を数点持っていると、展示の時に輝きあう。成長や作風が変わるのが見られるのもいい。

作品を義理で購入することはない。どこか「素晴らしい」と思えるものがないものは絶対には買わない。自分のコレクションの中でバランスを見て、新たな作品を購入する。

ただし、個人のコレクターなので限界がある。保管についても、大学が今年までなので、どうするか悩んでいる。コレクションとして大学に引き取ってもらえないか、最後は誰かにあげるかなどを考えている。

施設の職員自身がコレクターになり、生活の中で楽しむ経験をするのが大事。倉庫に眠らせていてはダメ。一般の人にもっと知ってもらい、理解者を増やしていく必要がある。

所感

(阿部)

以前にもよくギャラリートークなどでコレクションのお話を伺ったことはあるが、今回改めて聞くことで、初めて伺う話もあった。

「以前は支援の気持ちがあったけれど、だんだん薄れてきた」と言われていて、純粹に作品を家に飾る楽しさや、人に見せる嬉しさや、購入する時の楽しさが先にあるのだろうと感じた。(価格のついていない作品を交渉したり、まだ安い価格の時に買ったと言われていたり、自分がぜひ手に入れたと思う作品を購入する時は、相場かなと思う額に少し上乗せして金額を提示するとされているのを聞いて)

障害のある人の作品の魅力を伺った時に、他の作品より安くて楽しいと話していた。もう一步踏み込んで、なぜ障害のある人の作品のみを購入するのか、を聞けなかったが、大学の授業で、学生が自分の見方、感じ方を他の人に伝えるための教材として作品を使うと言っていたことが、印象的だった。すでにどこかで評価されていたり、ネットで検索したら誰かの評が見られるような作品ではないというのも、障害のある人のアートを使用される理由だと思った。また障害のある人の自由な表現は、学生が思うままに表現する助けになると感じられているのではないか、と思った。

川上先生のように、40点以上のコレクションは大変だが、欧米のように自分の気に入った作品を気軽に購入するような文化があれば、市場ができるのだろうなと感じた。

4. 作品仲介ギャラリーへのインタビュー調査

主にたんぼぼの家に所属する障害のあるアーティストの作品を展示し、売買できる仲介業者(2社)を対象に、作品選定の基準や価格などについて調査した。

1) 調査の概要

調査期間

2015年2月

調査実施先

あしたの箱(大阪市西成区岸里東1-6-7)

調査日 2015年2月19日

調査者 藤井、太田明日香

浜崎健立現代美術館(大阪府中央区南船場4-11-13)

調査日 2015年2月19日

調査者 藤井、太田明日香

調査方法

担当の方に1時間程度のインタビューを実施した。

調査体制

藤井(たんぼぼの家の職員)、太田明日香(編集者)で実施した。

2) 結果

インタビュー先ごとにデータを作成し、以下のカテゴリーでまとめ直した。

1. 障害者アートを知ったいきさつ

- ・前から興味はあった。施設のというより、個人に惹かれている。もともと作品に惹かれているので、あんまり、健常、障害というのにこだわりたくない。
- ・15年ぐらい前に商品を取り扱うようになって、10年前に南船場のショップとか神社とかでプライベート美術館という企画で、障害者アートを展示したときに、会場となった。それがきっかけ。

2. 作品を展示する目的、そこでの迷い、基本的なスタンス

- ・お客さん自身の感想で見てほしいので、できるだけボーダレスな感じを全面に出している。見に来てくれたお客さんに紹介するときに、「障害のある作家さんで〜という説明になってしまう。障害のある作家さんやから見に行こうかな、っていう人を取りこぼしてしまうことがありうる。
- ・自分の中では障害者アートかそうでないかに関わらず、好きな作家を展示している。一つの作品をきっかけにして、いろんな作家に興味をもってほしい。表現だけでなく、背景も知ってほしいと、ツアーにいったりもする。自分はおもしろいもの、好きだと思う物を紹介しているだけ。

- ・福祉施設だからというわけではなく、縁があって始まって、作品や作家がおもしろいと思って展示するようになってきた。障害者かどうかという表面的なことよりも、生き方や作品づくりの姿勢を見て、アーティストとして共感する面が多いので、続いている。今までグループ展で4~5人の作家さんの作品をしていたが、マンネリ化によりお客さんが飽きてしまうのを、テーマを変えるなどしてたえず変化を考えていく必要がある。
- ・作家が売れて生きれる時代がくればいい。一番大事なのは、その人たちが楽しく生きること。価値のある生き方ができること。

3. 周囲の反応

- ・ワークショップなどで制作風景なんかみたときに、集中力がすごいって言われます。
- ・過去4回の展示で、作品の姿勢というか、あざとくないというか、アートに明るくない方にも伝わってるようだ。お客さんは作品を鑑賞しているが、作家さんの姿勢も伝わっている。

4. 課題

以前から興味があったこともあるが、実際に仲介業者として障害のある人の作品を常時扱うには、障害者アートに関する何らかのイベントに参加したなどのきっかけが後押しになっている。

仲介業者としては、障害者健常者の垣根を越えた「ある作家さんの作品」として展示販売するようになっているが、一般の人に見てもらい買ってもらうためには、もう一つ上の工夫なり仕掛けが必要かもしれないと認識しているように見受けられた。

その工夫や仕掛けには、福祉施設職員と仲介業者との協同連携は有効のように思われる。

あしたの箱

大阪市西成区岸里東1-6-7

話し手:熊谷眞由美さん(ギャラリーあしたの箱オーナー)

調査日 2015年2月19日

調査者 太田明日香、藤井



現状

障害者アートには以前から興味があった。ただ精神障害のある人の作品の印象が強くていろいろ考えすぎてしまいギャラリーで展示するには気後れしていたところ、数年前に神奈川県平塚市の福祉施設studio COOCAの展示に出会い、ポップで可愛らしく誰にでも楽しめるのではないかとお願いして展示させてもらった。その後、アトリエコーナスという近所の施設で優れたアート活動をされていることを知って見学に、いたり、その他にも積極的にあちこちの展示を見るようになり、多彩な魅力を知ることができた。

ギャラリーでは、あくまでさまざまなジャンルで気に入った作品(お客さんに見てもらいたいと思う作品)を展示しており、障害者アートだけにこだわっているわけではない。ただ結果的にその比率は増えているし、お客さんにも楽しみにしてもらえるようになってきた。

展示では、基本的にフライヤーなどで障害者アートを前面に出さないようにしている。お客さん自身の感性で見てほしいので、できるだけボーダレスな感じを出している。ボーダレスにすることについては、「アールブリュット」で検索して見に来る人が多いので、元々興味をもっている人を取りこぼしているのではないかとこの悩みもある。

展示を見て、障害者アートに興味をもった人には作家の背景を説明するようにしている。また、背景を知ってもらうために、障害のある作家に来てもらったり、ワークショップを開催したり、福祉施設に見学に行くツアーを開催したりしている。障害者アートかそうでないかに関わらず、好きな作家を展示しているだけなので、一つの作品をきっかけにして、いろんな作家に興味をもってもらいたい。

価格については、聞かれたらアドバイスをするようにしている。売る／売らないについては、施設側が作品の価値を判断できなくて、価格をつけられない場合と、作家が手放したくないなどの理由で売りにくい場合とがある。

アドバイスするときは、大きさやかかった時間で判断している。加えて、作家さんの思いをくみとりつつ、適切だと思う価格を提示している。

出会いがあれば今後も障害者アートに関する展示は続けていきたい。いろんな人の目に触れる機会、特に今まで障害者アートを知らなかった人に出会ってほしい。

所感

(太田明日香)

前から何度か伺ったことがあり、福祉施設からの依頼ではなく、一般のギャラリーで自主企画の展示は珍しいと感じていた。

「アールブリュット」「障害のある」という言葉でくくると、イメージや見方が固定されているように感じていた。なので、熊谷さんがそういう言葉を使わずに企画を立てている点が新鮮に感じた。

しかし、熊谷さんはそのことで、もともと関心のある人たちを取りこぼしているのではないかとジレンマも感じている。一方、ワークショップや制作現場の施設を訪ねるなど、興味のある人には背景を伝える努力をしている。福祉関連や行政ではなく民間個人経営のレベルで、情報を発信し、実際に作品や商品を見せたり売ったりし、現場に興味を向けるという流れが作れているのは、貴重だと思った。

取材先などで、個人経営のギャラリーや雑貨店などのお店で、障害者アートや雑貨を扱いたいハードルが高いという声をよく聞いた。福祉施設側への商品開発やアートのセミナーは多いが、逆にお店側へのセミナーは少ないと思う。例えば、「福祉商品や障害者アートを売りたい、見せたい人」へのセミナーや、施設とのマッチングができると、販路開拓や障害者アートを広げることに役立つのではないかと思った。

浜崎健立現代美術館

大阪市中央区南船場4-11-13

話し手 浜崎健さん(浜崎健立現代美術館オーナー)／杉山夏樹さん(浜崎健立現代美術館館長)

調査日 2015年2月19日

調査者 太田明日香、藤井



現状

15年前に商品を取り扱うようになり、10年前に町南船場周辺でプライベート美術館という企画で、障害者アートを展示したときに、会場となった。そのときに作品や作家がおもしろいと思い、5年ほど前から展示するようになった。

展示については、障害者かどうかという表面的なことよりも、生き方や作品づくりの姿勢を見ていて、アーティストとして共感する面が多いので、続いている。展示方法は、たんぼぼの家でセレクトしてその後会場で見せ方を考える。

ただ、何回かやってマンネリ化も感じるし、障害者アートの人の特徴として、同じ表現が好きなせいか作風がずっと同じという部分があり、お客さんが飽きることもある。グッズ化する、展示や企画のテーマなどで見せ方に工夫が必要。見せ方のアイデアとしては、1人の作家の作品全部を展示する、制作風景を展示する、100人展、動物だけあるいは花だけなど、テーマを決めるなどが考えられる。

客層は、素直な作風のせいか、アートに詳しくない人がよく来る。また、ふだん来ないような年齢の高い方が多い。

作品の印象は、作ることの喜びを感じる。彼らは人の目を気にしないで創作している。だから、見る方が、「うまく描かない」とか「なにになにすべき」という価値観から解放される。また、作家たちは、描くことで生き生きしている。また、いろいろサポートもあって、描くだけでいいという部分もある。そういう意味では、自分の表現を貫くという本来の芸術家的生き方をしているともいえる。

今後の展開としては、障害のある人のアートと現代アートの世界の連携をとることで、マーケットになる可能性もあるのではと感じる。今まで現代アートの世界は、一つのジャンルを作って、それを壊すということがされてきた。一般化するには、エイブル・アートとカテゴリライズして、認知度を高めた上でフラットにしていくという方法もあるのではないか。個人的にカテゴリライズが必要だとは思っていないが、人目をひいたり、速く広めるためにはそういうことも必要だと思う。

所感

(太田明日香)

以前から名前は知っていたが、訪れるのは初めてで、ふだん目にする障害者アートを展示するギャラリーの雰囲気や客層とはぜんぜん違う場所だったので、とても驚いた。

浜崎さん、杉山さんともに福祉の専門ではないが、作品やアーティストをフラットに見ていたのが印象的だった。また、アールブリュットや障害者アートをどうとらえるかという点で、これまでもアートの世界ではあるジャンルを作った上で、壊すことがされてきたと言われて、はっとさせられた。今の障害者アートやアールブリュットと冠されて注目が集まる現状は、広まるための過渡期なのかもしれないと思った。

また、障害者アートだけのアートマーケットやオークションをやってみてはという提案があった。現代美術の枠で考えると、アートは1のものが100にも1000にも化ける世界で、作者の意図を越えて作品が広まり、価値が高まる。しかし、そのためにはプロデュース力が必要とされる。障害者アートはそこから浮いていると感じる部分がある。浜崎さんのような外部のギャラリーやキュレーターの力を借りて、そういうことをしてみるのも広がるきっかけになるのではないかと思った。

奈良県における障害のある人の芸術文化活動に関する調査

発行日:2015年3月31日

発行元:一般財団法人たんぽぽの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501

Email tanpopo@popo.or.jp

URL <http://tanpoponoye.org/>

監修:阿部こずえ、岡部太郎、森下静香(一般財団法人たんぽぽの家)

協力:太田明日香、太田啓子、菊竹智之、たけうちしんいち

*本書は「平成26年度 障害者の芸術活動支援モデル事業(厚生労働省)」の一環として制作しました。

また本書の調査をもとに、下記を制作しました。詳細については「障害とアートの相談室」のウェブサイトをご覧ください。



障害とアートの相談室

Email artsoudan@popo.or.jp

URL <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>



『障害とアートの相談室

なやんでひらいて 2歩すすむ ためのハンドブック』

障害のある人のアート活動を支援する人や当事者などの具体的な課題をマンガで紹介し、40人の先進的な活動を行う実践者や専門家の考え方や取り組みの事例を掲載しています。



『もうひとつの見方—奈良の障害のある人の表現』

障害のある作家10人の表現と表現がうまれる場の魅力を紹介。また、障害のある人の表現や作品の向き合い方、見方についてのメッセージを掲載しています。



<http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

一般財団法人たんぽぽの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 Tel.0742-43-7055 Fax.0742-49-5501

E-mail.artsoudan@popo.or.jp